

東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館

資料集 4

－米内山庸夫コレクション（瓦）－

2010

東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館

東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館

資料集 4

－米内山庸夫コレクション（瓦）－

2010

東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館

はじめに

このたび、東京大学教養学部美術博物館が収蔵する米内山庸夫コレクションの中から瓦を選び、資料集を制作いたしました。中国古美術品を中心とした『東京大学教養学部美術博物館資料集 1』（1985 年）、『東京大学教養学部美術博物館資料集 2 - 有職装束類 -』（2005 年）、そして本書と同時に刊行いたします『東京大学教養学部美術博物館資料集 3 - 銅鏡 -』と併せ、4 冊目の収蔵品資料集となります。

東京大学教養学部美術博物館は、1951 年に教養学部の分離横断型総合教育構想の一環として創立されました。2003 年には、旧制第一高等学校以来図書館として使われてきた建物に全面改修が施され、美術博物館と自然科学博物館を併せた「駒場博物館」の名称で、新たなスタートを切りました。現在では自然科学博物館と連携し定期的に展覧会を開催し、総合文化研究科・教養学部ならではの文系・理系の垣根を越えた活動を行っています。

現在までに集められた収蔵資料は多岐にわたり、旧制第一高等学校関連資料、梅原龍三郎氏寄贈のコプト織、中南米とアジアの考古学資料などがその一例として挙げられます。これらの資料は、教養学部文化系教員で構成される美術博物館運営委員会メンバーの尽力のもとに集められたものです。とくに東洋古美術については初代運営委員長であり東洋史・東洋考古学を専門とする三上次男氏を中心となり、少ない予算の中で収集の努力がおこなわれました。

本書収録の瓦資料は昭和 30 年頃（1955 年頃）に、三上氏と交流のあった米内山庸夫氏から寄贈されたものの一部です。米内山氏は大正末から昭和初期にかけて中国各地に赴任した外交官であり、陶磁器の研究者としても知られる人物でした。資料には採集場所の情報が几帳面に墨書きされており、そこから米内山氏の丁寧な研究姿勢がうかがえます。またその情報から、現代においてもその資料的価値を十分に有している資料であるといえます。

本資料集の刊行が、学術研究・教育など多方面での参考となれば幸いです。

2010 年 3 月

東京大学教養学部美術博物館
館長 三浦 篤

例言

- (1) 本書は東京大学美術博物館米内山庸夫コレクションのうち、瓦 108 点を資料化、収録したものである。なお、本書では塼や塼の範、特殊な陶製の建築部材については割愛した。
- (2) 本書では原則として、見開きの左頁に実測図と拓本、右頁に対応する写真を掲載した。拓本・実測図は 1/3 大であり、スケールを付した。写真の縮尺は不同である。
- (3) 一覧表は巻末に付した。
- (4) 資料作成は、実測・拓本・写真撮影・製図ともに中村亜希子が行った。
- (5) 本書の編集は、折茂克哉・岸本泰緒子・中村亜希子が担当した。

目次

はじめに	3
例言	4
目次	5
米内山庸夫コレクションの瓦	中村亜希子 7
米内山庸夫瓦蒐集の足跡と、遺跡のその後	中村亜希子 8
図 版	
北京市円明園の瓦（図・写真 1 ～ 3）	16～21
内蒙古自治区ホロンバイルの瓦（図・写真 3）	20～21
山東省臨齊故城他の瓦（図・写真 4 ～ 7）	22～29
遼寧省瀋陽故宮の瓦（図・写真 8・9）	30～33
浙江省杭州石塔頭瓦窯の瓦（図・写真 10 ～ 13）	34～41
浙江省杭州南宋故宮他の瓦（図・写真 14 ～ 19）	42～53
江蘇省南京眼香廟瓦窯他の瓦（図・写真 20 ～ 24）	54～63
一 覧 表	64～67

米内山庸夫コレクションの瓦

中村亜希子

当館所蔵の考古学資料には、1955年頃に米内山庸夫氏から寄贈された瓦塼が多く含まれる。一般的に戦前に蒐集された中国の瓦は、紋様の美しい完形の瓦当に限定されがちであり、その大多数は購入品で出土場所を特定できるものは稀である。しかし、米内山庸夫コレクションには、未製品や瓦当紋様を施紋するための型である範や多くの破片が含まれ、同じ場所で採集されたものも多い。また、著作に瓦を入手した場所や経緯を詳細に記述しているため、現在も考古学資料としての価値が高いと言える。このような考古学的視野を持った資料蒐集を行った米内山庸夫氏は、陶磁器の研究でも知られているが、実は中国駐在の外交官であった。



米内山庸夫氏近影
(青森県立図書館 1972 より転載)

1888年に青森県上北郡七戸町にて誕生した米内山は、1907年に仙台の第二高等学校に入学した翌年、上海の東亜同文書院に8期生として赴いた(社団法人滬友会 1982)。東亜同文書院とは、明治34年(1901年)に東亜同文会によって中国に設立された日本人のための高等教育機関である。米内山コレクションの瓦の中には、「南京孝陵 明治四十三年」の墨書きの注記を持つものがあり、東亜同文書院在学中にはすでに考古学資料に興味を抱いていたことが窺われる。1911年に同校を卒業後、今度は外務省留学生として北京に留学する。外務省に入り外交官としての道を歩み始めた米内山は、広東での勤務を経て、大正14年(1925年)春から昭和3年(1928年)の春にかけて山東省の済南に赴任し、続いて昭和7年(1932年)夏までを浙江省の杭州に赴任して領事となり、昭和8年(1933年)秋から昭和11年(1936年)夏にかけては満洲ハイラル領事を歴任した(常盤山文庫中国陶磁研究会編 2009)。1936年からは外務省文化事業部に勤務している。

中国各地に赴任した際、米内山は機会のあるたびに古蹟名勝を訪れ、見聞きしたことや感じたことを『蒙古風土記』(米内山 1938)や『支那風土記』(米内山 1939)をはじめとする著作に詳細に書き記した。美術的価値の高いものばかりを蒐集するのではなく、小さな破片や製品として完成していない未製品、窯道具といった地味な考古学資料を蒐集・観察し、その土地に暮らす人々の生活や価値観を見つめる米内山の姿勢には現在も学ぶところが多い。

米内山の蒐集は瓦に特化したものではなく、むしろ陶磁器に対する関心の方が高かったようである。出光美術館、東京国立博物館、京都大学など複数の機関に、米内山が蒐集した膨大な陶磁器片や窯道具の破片が収められている。一方で、内蒙古では石器製作過程に生じた石の破片を多量に含む石器を採集した(大貫 2002)。米内山の蒐集で一貫して見られるのが、出土(入手)地点の記録、製作技法を重視した遺物蒐集という姿勢である。そのため、現在でも研究対象資料としての価値が高く、近年陶磁器や石器の分野でも米内山コレクションの再評価が進んでいる(大貫 2002・常盤山文庫中国陶磁研究会編 2009)。

米内山が文化事業に携わっていた故か、中国で調査を行った三上次男や駒井和愛といった本学の考古学者と交流があったことも窺える(水野他 1938)。当館が収蔵しているのは、米内山の蒐集資料のうち瓦塼と石器、植物標本であり、すべて寄贈されたものである。これらの資料が1951年に立ち上げられた当館に寄贈されたのは、当館の立ち上げに携わった三上と米内山の交友関係の深さを示唆しているのではないだろうか。

米内山庸夫瓦蒐集の足跡と、遺跡のその後

中村亜希子

中国における瓦の出現

米内山庸夫の瓦蒐集の足跡をたどるにあたって、まずは中国における瓦の出現と変遷について概観する。東アジアにおいて建築物の屋根材として瓦が用いられるようになるのは、确实には西周前期からである。出現当初の瓦は豊鎬地区（河南省洛陽付近）を中心に王朝と密接な関係をもつ地域でのみ出土するが、春秋時代には西方に位置する秦を中心に西周の瓦とは特徴を異にする瓦が用いられ、戦国時代には東周や秦の他、趙や燕、齊など六国のうち北方に位置する国々を中心に、独白色の強い紋様の瓦を製作するようになる。秦や漢による統一を経て瓦を使用する地域は爆発的に広がり、用いた瓦にも徐々に斉一性が見出せるようになる。特に統一以前は基本的に瓦を使用していなかった地域にも瓦が普及したという点で秦漢帝国の出現は非常に大きな画期であった。前漢中期頃には、大量生産を見越して型を用いた瓦作りが普及する。その後も瓦は、南は中国嶺南地域を経てベトナムへ、東は朝鮮半島を経由して日本へと伝播し、それぞれ独自に変化しながら受容された。これらの地域では、現在に至るまで中国中原で生まれた東アジア特有の瓦が用いられ続けている。瓦の受容以後、東アジア諸国では王朝交代や遷都などをきっかけに瓦の紋様や製作技法に徐々に変化を見せていく。

古代の瓦は大きく、屋根に凹面を向けて葺かれる平瓦と、凸面を向けて葺かれる丸瓦に分けられる。平瓦は大きな土製の円筒を主に四分割して焼成したもの、丸瓦は小さな土製円筒を二分割して焼成したものである。平瓦と丸瓦を交互に組み合わせて屋根を葺くことによって雨漏りを防いでいた。また、軒の先端に葺く丸瓦には紋様を施した瓦当を接合した軒丸瓦が用いられ、その紋様にそれぞれの個性が表れる。今日の日本でもこのような本瓦葺きによる瓦葺きの屋根は、古い寺院建築などに見られる。

米内山コレクションの瓦は大半が宋代以降の比較的新しいものである。よって米内山コレクションのみによって中国の瓦を通時的に述べることは不可能であるが、一方で古いものの方が骨董的価値を認められ蒐集されやすかったため、従来見落とされがちだった比較的新しい時代の瓦の解明に非常に重要な役割を果たすといえる。以下では基本的に米内山が古瓦を蒐集した年代順に従って、米内山の瓦蒐集の状況を紹介する。

〔山東省済南赴任時代〕

山東省臨淄齊故城

臨淄齊故城は山東省淄博市臨淄区に位置し、旧臨淄県城の西面と北面に広がっている。故城は南北約 4.5 k m、東西約 3.5 k m の広大な大城と、その西南角に接続する小城によって構成されており、小城内には「桓公台」と呼ばれる大規模な宮殿建築が建てられた土台が残されている。なお、中国における「城」とは城壁に囲まれた都市を意味し、城内では宮殿の他に墓や、骨器や金属器を製作した工房の遺跡が見つかっている。この臨淄齊故城は一般的に齊献公元年（紀元前 859 年）に都が置かれてから、紀元前 221 年に齊が秦によって滅ぼされるまで齊の都が置かれた城であるとされている。また過去には、前漢に鉄官が置かれていたことを示す遺物が出土しており、出土する他の遺物にも戦国時代以前のものに加え、秦漢時代のものが多く含まれることから、秦漢時代にも臨淄齊故城が地方都市として栄えていたことが窺われる（郡 1972）。

米内山は大正14年（1925年）暮れから昭和3年（1928年）春にかけて、山東省済南に赴任しており、昭和2年（1927年）の正月と秋に臨淄を訪れたことが『支那風土記』に記されている（米内山1939）。正月に訪れた際は大雪に見舞われ故城探訪の目的を果たすことができず、秋に再訪したのである。遺跡を踏査したほか、臨淄高等小学校の校長から故城址出土の蓮華紋（図・写真7-26）や文字のある瓦当の破片（図・写真5-17・19）4つを譲り受けた。なお、他にも「昭和三年三月於臨淄古城」（図・写真7-25）、「山東省臨淄古城3 昭和三年」（図・写真4-12）と墨書きされた瓦があり、米内山が杭州に赴任する直前にも再度故城を訪れていたことが窺われる。「如何に當時の臨淄が繁華の土地であったか、想像せらる。それがいまた、一面の畑地になってゐる。これを発掘研究することは先秦時代から漢代にかけての文化並に歴史研究に資するところ決して少なくないであらう」（米内山1939）という米内山の言葉からも、臨淄齊故城に対する関心の強さが察せられる。

臨淄齊故城で採集された瓦の多くは戦国から漢代にかけてのものである。この時代は上述したように、中国において爆発的に瓦が普及した時期である。戦国の各国ではそれぞれが独自の瓦を製作・使用したが、米内山蒐集品にも目立つ、樹木とその両脇に馬などの動物（図・写真4-12・14・16）や幾何学紋様（図・写真4-15）を配した半円形の瓦当は齊の国に特徴的なものであった。しかし、戦国の齊が秦によって滅ぼされると、臨淄でも円形の瓦当をもつ軒丸瓦が製作されるようになる（図・写真5-20）（中村2007）。東周や燕、齊などの東方諸国が半瓦当を好んで使用していたのに対し、これらの国々を滅ぼした秦は円瓦当を主体的に用いていた。

この時代は瓦の普及・大量生産に伴って新しい製作技法が取り入れられた時代でもある。出現以来瓦は、粘土紐を巻き上げた内面に当て具を当て、外面から叩き板で叩いて成形されていたが、この時代に新しく型を用いた瓦生産が普及するようになる。円筒状の型には布が巻かれ、その上から粘土紐を巻き上げて、外面から叩き板で叩いて成形するようになったのである。よって、瓦の凹面には反転した布目の痕跡が確認されるが（図・写真6-23）、一部、型から外した後に補足のために凹面に格子目の当て具を当てて再度叩き締めた痕跡を残す瓦もあり（図・写真7-24）、製作技法が転換する時期の特徴を示している（中村2007）。以後、明清時代に至るまで中国の瓦は基本的に型を用いて製作され続けた。

〔浙江省杭州赴任時代〕

浙江省杭州南宋故宮

杭州は南宋の都である。靖康元年（1126年）、北宋最後の皇帝である欽宗が金によって汴京（開封）から連れ去られ北宋が滅亡すると、翌年、欽宗の弟である趙構（高宗）が南京において宋を再興した（南宋）。金の追撃を避けて紹興8年（1138年）臨安（浙江省杭州）に仮の首都が置かれたが、以後汴京に還都することは叶わず、1276年にモンゴル軍によって占拠されるまで臨安が南宋の首都として繁栄した。その南宋の首都、臨安の遺跡は西湖の東岸に位置し、自然の地形を利用した大城の中、鳳凰山の東麓と饅頭山に挟まれて小城が存在する。

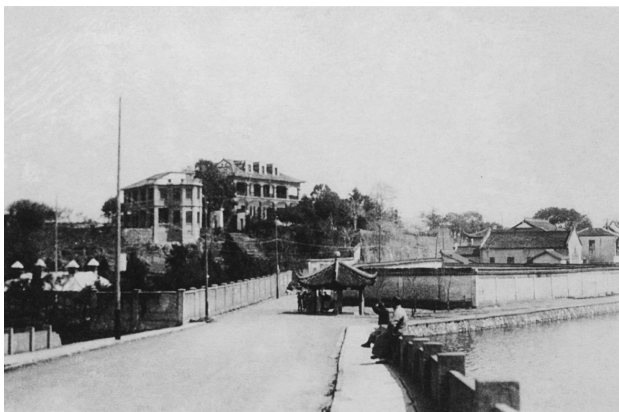
昭和3年（1928年）夏、山東から杭州に赴任した米内山は、杭州に駐在した昭和7年の夏まで、公務の合間を縫って精力的に新旧ふたつの南宋青磁の官窯（修内司窯と郊壇下窯）跡を探すべく、鳳凰山麓を歩き回った（米内山1939）。青磁片や窯道具を採集する傍ら、瓦当の破片も各所で集めている。瓦に記された墨書きからは、西湖畔から鳳凰山の南宋皇城跡に通じる萬松嶺（図・写真18-74）や、烏龜山麓の南宋郊壇（皇帝が天と地を祭る祭壇）下など（図・写真18-76）、官

窯探しの際に採集したものであろうことが窺えるものが多く、記録からは、鳳凰山付近で道路工事などにともなって穴が掘られていると聞いた際に駆けつけたことが窺われる。また、米内山は、当時四明公所（寧波同郷人の互助活動の拠点であった会館で、貧困者の救済や葬儀・埋葬も行っていた。米内山の記述から察するに、杭州の四明公所には巨大な棺の安置所があったようである。）が建てられていた場所が、地理的条件上、南宋皇帝が座した宮城の所在地と目し、瓦当片4点を採集したという（墨書き注記と一致するものは、図・写真 15-57・58・60）。

宋代の建築については、北宋の哲宗・徽宗に歴任した李明仲が勅命によって編集した建築技術の専門書である『营造方式』が存在する。元符3年（西暦1100年）の李明仲の撰による『营造方式』が最初に出版されたのは崇寧2年（西暦1103年）であるが、今日に伝承されているものは南宋高宗の紹興15年（西暦1145年）に再版された紹興本の系統に属するものとされる。『营造方式』について日本語訳と解釈を与えた『营造方式の研究』（竹島1970）によると、屋根を瓦で葺く制度には甃瓦葺と廔瓦葺の二等級があるという。前者は丸瓦と平瓦を用いて屋根を葺く本瓦葺を意味し、後者は日本では一般的に使われていない、平瓦のみで屋根を葺いた方法である。甃瓦葺は殿閣・廳堂・帝榭など一般に格の高い建築に用いられる一方、廔瓦葺は中等や下等の建物に用いられた。北宋の都である汴京（河南省開封）の汴河兩岸と城門内外の都市生活を描いた「清明上河図」からも分かるように、宋代ではすでに下等の建物にまで瓦葺きが普及していたことが理解される。米内山資料には見られないが、軒先に葺く平瓦に装飾紋様を施した軒平瓦も宋代ではすでに広く普及していた。なお、釉薬を施した瑠璃瓦も製作されていたようであるが、宋代以前の瑠璃瓦は基本的に緑色の釉薬を施した緑釉瓦のみであり、北京の故宮や天壇といった明清時代以降の建築物に見られる黄色や青の釉薬は元代になってから大々的に普及したことが窺われる。瓦当の紋様は秦漢時代に流行した卷雲紋瓦当の衰退後、魏晉南北朝以後は仏教の伝来とともに蓮華紋が主体となった。南宋故宮から出土した蓮華紋瓦当もこの流れを汲むものであると考えられる。

浙江省杭州石塔頭瓦窯

米内山コレクションの瓦の中で唯一、出土地が確定できないのが「石塔頭瓦窯」である。しかし、遺物の墨書きから「石塔頭瓦窯」が杭州に所在することが明らかであり、米内山が杭州領事だった時期に蒐集されたものであると理解される。また、繭山龍泉堂が所有する『米内山庸夫蒐集 陶片目録』には「石塔頭出土品」という項目があり、瓦窯については触れていないものの、「石塔頭は杭州寶石山の下即ち旧日本領事館のあったところである」という記載がある（常盤山文庫



1920年代杭州日本領事館周辺（李2005より転載）



2007年現在の旧日本領事館建物（筆者撮影）

2009)。この旧日本領事館であった建物の一部は、現在も西湖北岸の断桥付近に存在し、付近にはこの一帯がかつて「石塔頭」と呼ばれていたことが記された案内板が立っている(2007年現在)。かつて日本領事館の東隣には宋代からの名刹である昭慶寺が位置していた。「石塔頭瓦窯」は宋代の昭慶寺に瓦を供給した窯ででもあったのだろうか。寺には米内山が杭州に駐在していた当時、衰退したとはいえ100人以上の僧侶がいたようであるが、現在は既に廃絶され、跡地に青少年活動センター(少年宮)が建てられており、寺の建物が一棟のみ改修を経て残されている。

石塔頭瓦窯から出土した遺物は、その多くが写実的な牡丹紋や菊花紋(総称して「花卉紋」とする)を施紋した瓦当である。同時代に帰属すると思われる南宋故宮出土の瓦当がすべて蓮華紋瓦当なのに対し、対照的である。さらに、蒐集品の中にはこれらの紋様を瓦当に施紋するための型である土製の瓦当範が3点(図・写真13-49・51)含まれていることから、米内山が「瓦窯」と記したように、遺跡が瓦の生産に関するものであったことが窺われる。米内山が生きた時代である1924年に倒壊した西湖南岸の雷峰塔では、2000年に発掘調査が開始され、その報告書には石塔頭瓦窯から出土したものと同一ような紋様の瓦当が掲載されている(浙江省文物考古研究所2005)。宋代の杭州において瓦当紋様の違いは何を意味していたのだろうか。「石塔頭瓦窯」は現在、その所在を知られていない。南宋故宮では蓮華紋瓦当のみの使用、石塔頭瓦窯では写実的な花卉紋の瓦当のみの生産、そして雷峰塔では両者が等しく出土する。年代差であるのか、葺かれた建物の性格の違いであるのか、雷峰塔の建て替えの時期・背景も含め重要な研究課題である。

なお、この花卉紋のうち牡丹の紋様を施した瓦当は、それを模したと考えられるものが寧波や福建、ひいては日本の博多でも出土する(常松1992)。石塔頭瓦窯で出土したものの多くは牡丹を精緻に表現したものであるが、その他の地で出土するものはデフォルメされ、もはや牡丹と識別できないものが多い。牡丹は唐代以降富貴の花としてもてはやされた花であり、金属工芸や陶磁器の紋様としても広く用いられた。杭州の花卉紋瓦当の花卉の背景には魚々子(先が円管状の鑿を密に打ち詰めた地紋)のような紋様が施されており、前者の紋様との関係を示唆する(図・写真10-33・35・36、11-37・39など)。

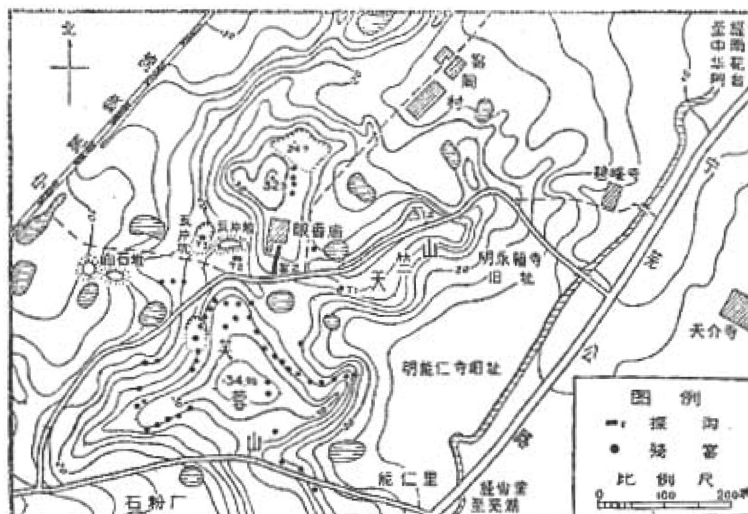
米内山はこの他、杭州駐在中周辺各地に足を伸ばした際にいくつかの瓦片を蒐集した。昭和3年に普陀山に登った際には、普陀三大宗林のひとつ法雨寺の山門で龍紋の瓦を拾い(図・写真19-77・78)、餘姚へは陶磁器の窯を探しに2度訪れ、昭和6年4月に訪れた際には龍山の寺廟跡で蓮華紋の古瓦を拾った(図・写真18-76)。

南京眼香廟瓦窯

南京眼香廟瓦窯は南京中華門外の雨花台から程近い、眼香廟という小さな廟のある集落に位置している。1928年の春に中国人の劉敦楨氏が踏査を行い、『明会典』に記される明代の官窯「聚宝山官窯」に比定した(南京博物院1960)。米内山が南京を訪れた詳しい日時は不明である。しかし、『支那風土記』の記述から、南京眼香廟瓦窯と近隣の報恩寺を訪ねたのは、米内山が杭州領事であった1930年前後のことと推測される。米内山が窯跡の存在を知っていて遺跡を訪れたかどうかは不明であるが、同じころに踏査をした人物がいたことから察するに、この付近で瑠璃瓦が多く出土するということが近隣の人々に広く知られていたのではないだろうか。なお、この遺跡では戦後の1958年から1959年にかけて行われた調査によって、眼香廟の付近一帯で60基余りの瓦窯が確認されている(楊・盧2001)。完成した瓦を保管した倉庫や釉薬をかける前段階の素焼きの瓦を保管した倉庫も見つかっており、ここが宮殿や皇帝陵、報恩寺に瓦を供給した官

窯であることは疑いない。

米内山が蒐集した遺物には龍や鳳凰、花卉の紋様をもつ軒丸瓦や滴水瓦の他、報恩寺の塔に用いられたと思われる磚、その他土製で釉薬を施した建築部材が含まれる。釉薬が施されたものの他、素焼き段階の瓦の破片もある（図・写真 20-80～82・84、21-87～89）。なお、寄贈資料の中には「南京孝陵明治四十三年」と墨書きされた



南京眼香廟瓦窯周辺図（南京博物院 1960 より転載）

ものがあるが、これは米内山が上海の東亜同文書院に在学中取得したものと思われる。世界七不思議のひとつに数えられていた南京慈恩寺（後の報恩寺）の焼き物の塔に興味を持っていた若き日の米内山が、外交官になった後に再び南京の地を訪れ寺跡や窯跡を踏査したことが、著作の記載・墨書きき双方から窺われる。慈塔は永楽 10 年（1413 年）から宣德 6 年（1431 年）の 19 年間の歳月をかけて建てられ、咸豊 3 年（1853 年）に太平天国の乱によって破壊されたという。

米内山が南京を訪れた当時、報恩寺は主に小学校として用いられていたというが、2007 年南京を訪れた際にこの地を訪れると、建物は跡形もなく消えていた。寺のみならず周囲の古い建物はすべて壊され、ちょうど瓦礫の山となった直後のことだったようであるが、瓦礫の中に壊れかけた報恩寺の亀趺のみが確認できた。眼香廟窯跡の地は、かつて点在する百姓家を除けば一面の麦畑であったという。しかし、現在では一帯が高層マンションの林立する住宅団地と化しており、窯跡の名前の由来となった眼香廟も確認できず、窯跡にたどり着くこともできなかった。これら 2 つの遺跡では近年大々的な発掘調査が行われたようで、2008 年の重要考古発見に選出された（国家文物局 2009）。これによると、報恩寺跡は発掘調査を経て「南京大報恩寺遺跡公園」として整備されるようである。一方の窯跡の発掘は建設事業に伴う部分的な緊急発掘であり（南京窯崗村 30 号明代瑠璃窯址発掘）、14 基の窯址の他に工房跡、東呉や東晋、清代の墓が検出された。

明清時代の瓦は上述の宋代以前の瓦とは大きく様相を異にする。南宋が滅び、モンゴルの元朝による統治を経て大きな変革を遂げた中国の瓦は、明清時代には現在中国の古建築物に葺かれている瓦とほぼ同じ内容になった。すなわち、北京の故宮や天壇などに葺かれる瓦に代表され、本瓦葺建物に用いられる緑色や黄色、青色などの色彩豊かな瑠璃瓦と、古くから残る四合院に葺かれているような灰色素焼きの平瓦である。

明代末の 17 世紀に書かれたとされる宋応星の『天工開物』には、平瓦の製作についての記載がある。基本的には漢代に普及した平瓦の製作技法と大差ないが、型に巻きつける粘土素材は紐状の粘土ではなく、大きな粘土塊から鉄線を用いて薄く切り出した板状の粘土であることが窺われる。この技法は明代に発明されたものではなく、中国南方では早くから用いられていたようであるが、全国的に広まったのは元代以降と考えられる（佐川 2009）。平瓦の製作技法のみが『天工開物』において詳述されているということは、平瓦のみで屋根を葺く「匭瓦葺」が明代末に屋根を葺く一般的な方法であったと、暗に示していると考えて良いだろう。

一方で、等級の高い建物に葺かれる瓦は、より煌びやかで特別なものとなり、一般的に用いら

れる素焼きの平瓦との分化が進む。素材となる粘土は釉薬の色彩が映えるように白色の洗練されたものが選ばれ、従来基本的に緑色しか存在しなかった瓦の釉薬は、青色や紫色、白色、黒色、黄色などが加えられ多彩になる。製作技法も、凹面に型に敷いた布の痕跡が見られないものが多いことから、一枚一枚個別に製作した瓦が存在する可能性が考えられる。一般に滴水瓦と呼ばれる、平瓦の先端に逆三角形に近い形の瓦当を接合した軒平瓦が普及し、その紋様が軒丸瓦の紋様とセットになることも大きな変化である¹⁾。宮殿や皇帝陵に用いられた瓦の紋様は、皇帝を示すとされる五爪の龍が好まれた。

〔満州国ハイラル領事赴任時代〕

昭和8年（1933年）秋から昭和11年（1936年）夏にかけて、米内山は満洲ハイラル領事として内蒙古に赴任した。当地はあまり瓦が普及しなかった地域ということもあり、この時期に米内山が蒐集した瓦は比較的少ない。米内山の内蒙古における調査についての詳細は『蒙古風土記』（米内山1938）に詳しく、また田辺美江による論文にまとめられているので参照されたい（田辺2002）。内蒙古で蒐集された瓦は、ホロンバイルのハルハ廟の瓦わずか1点のみである（図・写真3-11）。ホロンバイル平原はモンゴルと中国の国境に位置し、米内山の駐在中1935年1月8日にはノモンハン事件のきっかけとなる「ハルハ廟事件」が勃発している。

その他、昭和10年（1935年）瀋陽（当時の奉天）に赴き、10月15日に故宮で緑釉や黄釉のかかった瓦を採集している。瀋陽故宮は遼寧省瀋陽に残る清朝の離宮である。清朝の前身である後金時代の1625年に創建され、ヌルハチとホンタイジの皇居として機能し、清朝成立後は離宮として使用された。蒐集した瓦のうち1点は瓦当下半が滴水瓦のような形をした特徴的な軒丸瓦（図・写真8-28）であり、瀋陽では他にもこの形態の軒丸瓦が報告されていることから（京都大学大学院文学研究科考古学研究室2009）、あるいはこの地域・時代に見られる特殊な瓦であるのかもしれない。

〔外務省文化事業部勤務時代〕

1936年夏、ハイラル領事としての仕事を終えた米内山は、帰国し外務省文化事業部勤務となった。この時期の蒐集品は北京円明園の瓦であり、米内山が中国に出張した際に蒐集したものと思われる。墨書きの注記には「北京円明園遺品 昭和十一年十一月」と記されているが、戦前期外務省記録によると、昭和11年（1936年）11月23日から同12月23日まで米内山が中国出張を予定していたことが窺われる。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015028900「47. 米内山領事満支出張 昭和十一年十一月」（外務省）によると、出張の日程（予定）は、

11月23日 東京発
11月27日 奉天着（註：奉天は現在の瀋陽）
11月28日 奉天発 新京着（註：新京は現在の長春）
11月30日 新京発
12月1日 天津着
12月4日 天津発 北平着（註：北平は現在の北京）
12月8日 北平発 天津着
12月9日 天津発 済南着
12月11日 済南発 張店着

12月12日 張店発 青島着
12月15日 青島発
12月16日 上海着
12月20日 上海発 南京着
12月22日 南京発 上海着
12月23日 上海発 帰朝

となっている。出張の目的は「満洲国及中華民国ニ於ケル文化事業部関係各事業視察並之等事業遂行ニ関シ満洲国及中華民国側ト提携連絡方取計ラシムル為メ」とあり、出張が予定通りに遂行されたとすれば、北京に滞在したのは厳密には12月4日から8日の間であり、その間に円明園に立ち寄り瓦を採集したと考えられる。北平が北京と名称を変えたのは日本軍によって北平が制圧された1937年7月以降であるため、墨書き自体が瓦蒐集直後に書かれたのではなく後に記されたものであり、日付に関する注記に厳密性を欠いた可能性が高い。

円明園は北京市海淀区に位置する清朝の離宮である。康熙48年(1709年)に造営が開始され、その後150余年の間、不断に拡張、造営された。乾隆帝の時代には東に長春園、東南に綺春園を増設して円明園と総称し、イエズス会士らが設計した西洋庭園をも備える広大で優美な庭園であった。しかし、1856年にアロー戦争(第二次アヘン戦争)が勃発すると、イギリス・フランス軍によって破壊・略奪を受け廃墟と化し、その後も義和団事件や文化大革命を経て荒廃が進んだ。

円明園の遺跡に対する保護活動が活発化したのは20世紀も終わりに近づいてからである。1988年には中国国務院によって全国重点文物保护单位に指定され、2000年以降は円明園遺跡の公園化が計画されて発掘調査が行われている(北京市文物研究所2006)。それにともない近年では、戦前に日本や欧米諸国に流出した円明園の宝物を回収しようとする動きも活発である。

以上が米内山コレクションにおける瓦の蒐集についての概略である。米内山庸夫が滞在した間、中国はまさに激動の時代を迎えていた。中国における最後の帝国である清朝は米内山が東亜同文書院を卒業した1911年に崩壊し、中華民国が成立する。外交官として杭州に駐在した1931年には満洲事変が勃発し、1933年にはその「満洲国」へハイル領事として赴いた。ハイル近郊、モンゴルとの国境地帯では後年ノモンハン事件が起こり、米内山が長年にわたる中国勤務を終え日本に帰国した翌年である1937年には盧溝橋事件を契機に日中戦争が勃発して、日中関係は悪化の一途をたどった。このような時代背景をもつ蒐集品については(特に国際的に)評価が分かれる可能性を否定できない。しかし、骨董的な優品美品ではなく小破片や製作過程に由来する道具に注意をはらった蒐集方法や、著作における入手時の詳細な記録・考察を目にする限り、米内山コレクションが学術目的で蒐集された資料であるということに疑いはなく、その着眼点には今も学ぶべきところが多い。

謝辞

本図録の作成にあたり、以下の方々・機関はじめ多くの方にご協力いただいた。末筆ながらお礼申し上げます。(敬称略)

大貫静夫・岡村秀典・小畑弘己・川村佳男・佐藤一郎・佐藤サアラ・田辺美江・谷豊信・常松幹雄・三笠景子・向井佑介

東京大学考古学研究室・京都大学人文科学研究所・福岡市埋蔵文化財センター・福岡市博物館・

註

1) 中国西北部の西夏ではすでに滴水瓦を用いていた。

引用文献

- 大貫静夫 2002 年『内蒙古細石器文化の研究』平成 10 年度～平成 13 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書
- 京都大学大学院文学研究科考古学研究室 2009 年『京都大学所蔵古瓦図録Ⅲ 天沼俊一コレクション 中国・朝鮮篇』
- 郡力 1972 年「山東省臨淄齊故城試掘簡報」『文物』1972 年第 5 期
- 国家文物局 2009 年『2008 中国重要考古發現』文物出版社
- 佐川正敏 2009 年「中国における造瓦技術の変遷」『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』科学研究費補助金 (基盤研究 A) 研究成果報告書 研究代表者毛利光俊彦・山崎信二
- 社団法人滬友会 1982 年『東亜同文書院大学史』興学社
- 浙江省文物考古研究所 2005 年『雷峰塔遺址』文物出版社
- 竹島卓一 1970 年『营造方式の研究』中央公論美術出版
- 田辺美江 2002 「米内山庸夫氏とホロンバイルの細石器」『内蒙古細石器文化の研究』大貫静夫編
- 常松幹雄 1992 年「博多出土古瓦に関する一考察 ―押圧文瓦・草花文瓦の分布とその背景―」『法哈噠』第 1 号博多研究会
- 常盤山文庫中国陶磁研究会編 2009 年『米内山陶片』常盤山文庫
- 中村 2007 年「臨淄齊故城出土瓦の検討」『中国考古学』第 7 号日本中国考古学会
- 南京博物院 1960 年「明代南京聚宝山瑠璃窯」『文物』1960 年第 2 期
- 北京市文物研究所 2006 年『円明園長春園含經堂遺址発掘報告』文物出版社
- 水野清一・駒井和愛・三上次男 1938 年『北満風土雜記』座右寶刊行會
- 楊新華・盧海鳴 2001 年『南京明清建築』南京大学出版社
- 米内山庸夫 1938 年『蒙古風土記』改造社
- 1939 年『支那風土記』改造社
- 李虹 2005 年『西湖老照片』龍州出版社
- JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B05015028900 「4 7. 米内山領事滿支出張 昭和十一年十一月」(外務省)

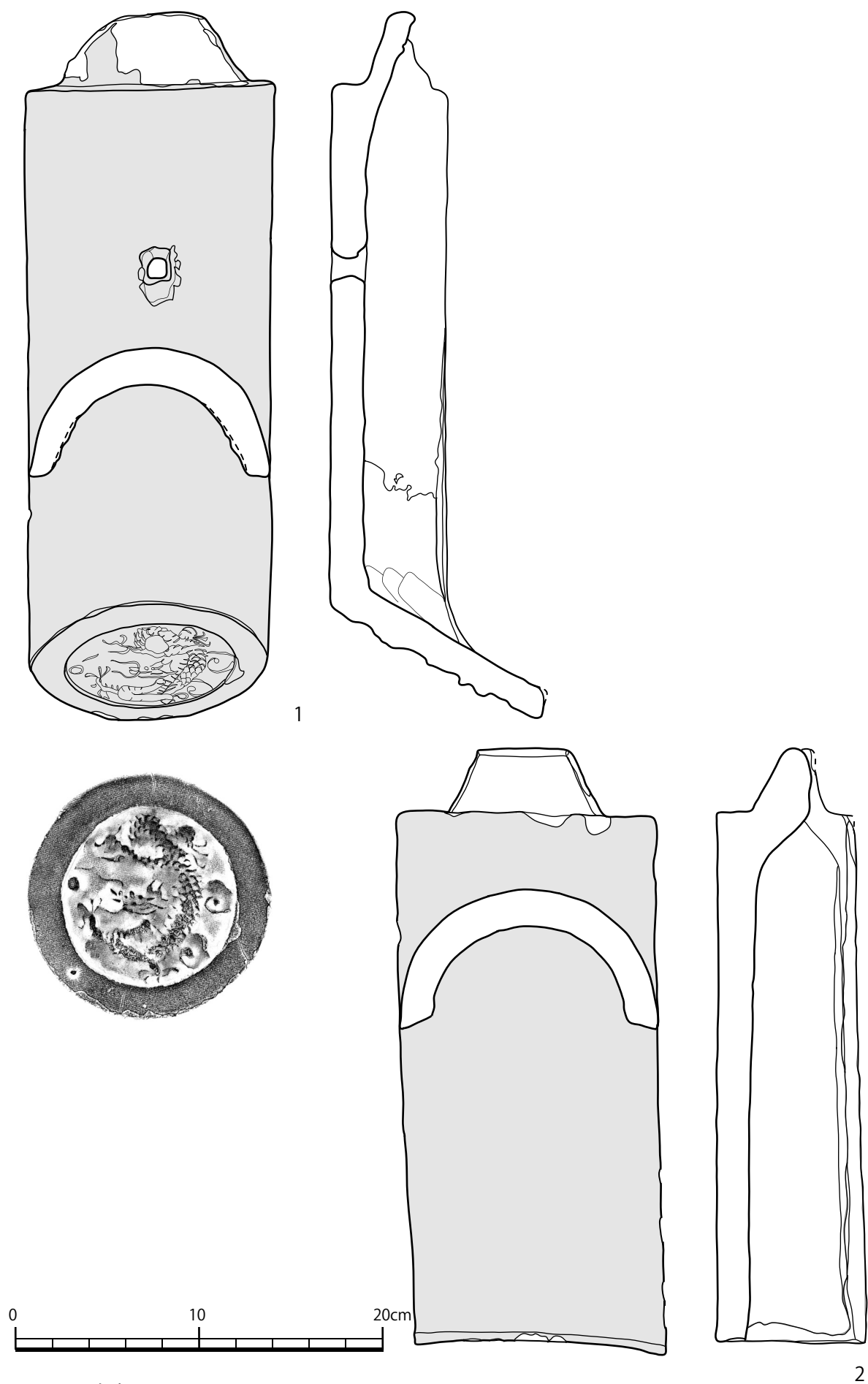


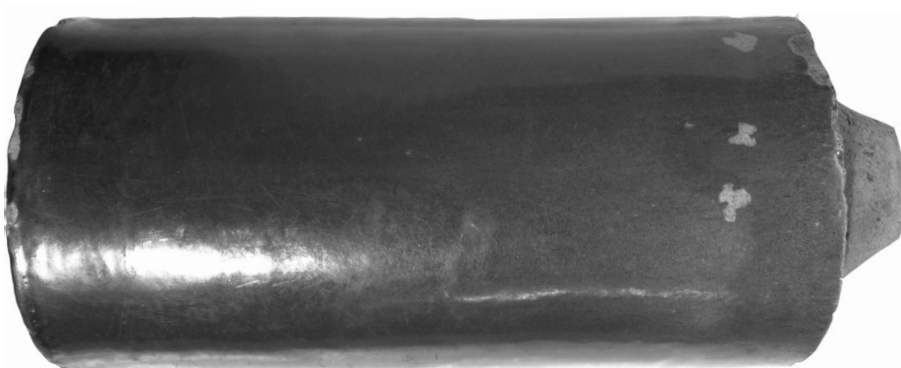
图1 北京市円明園



1



2



3

写真1 北京市円明園

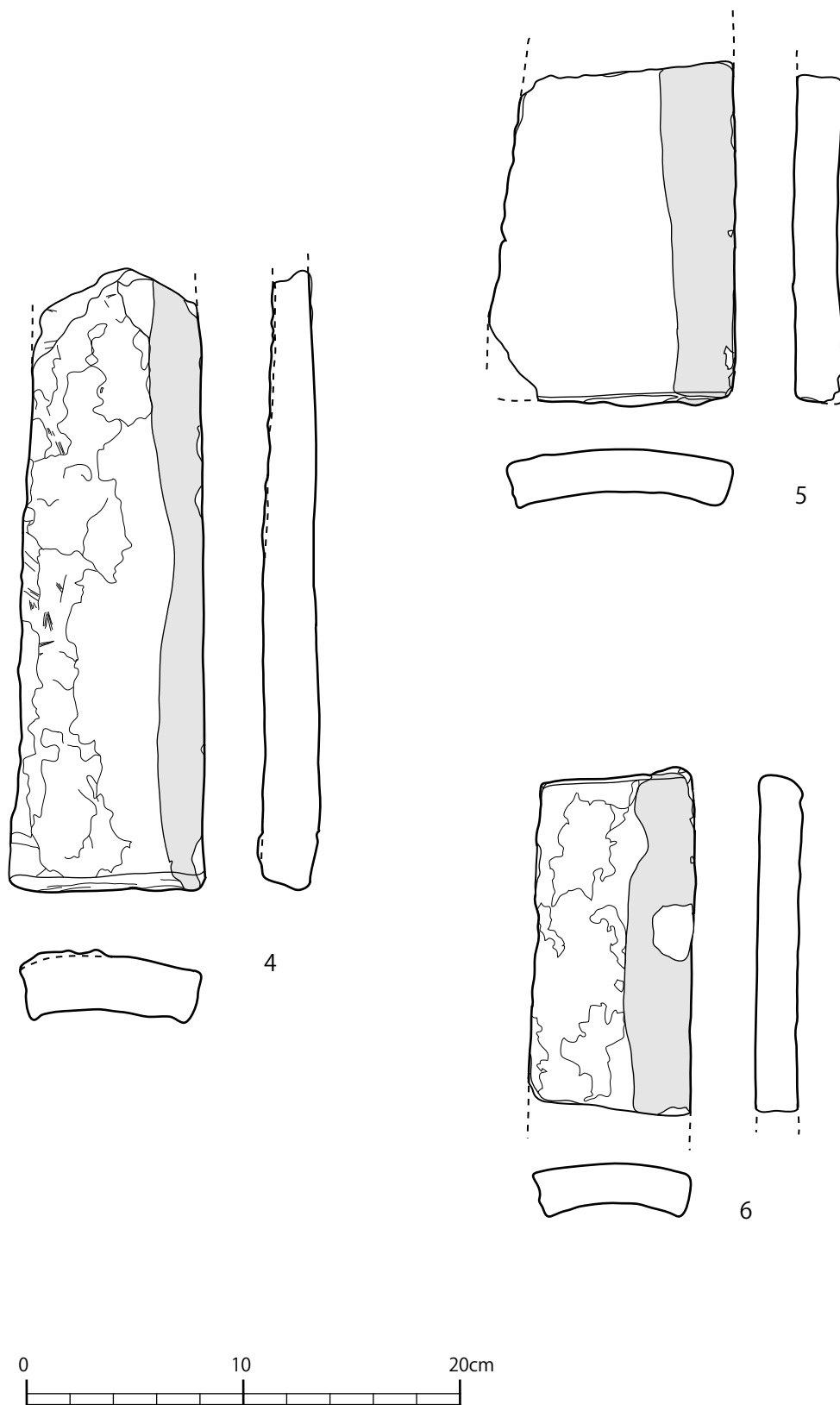


图2 北京市円明園



写真 2 北京市円明園

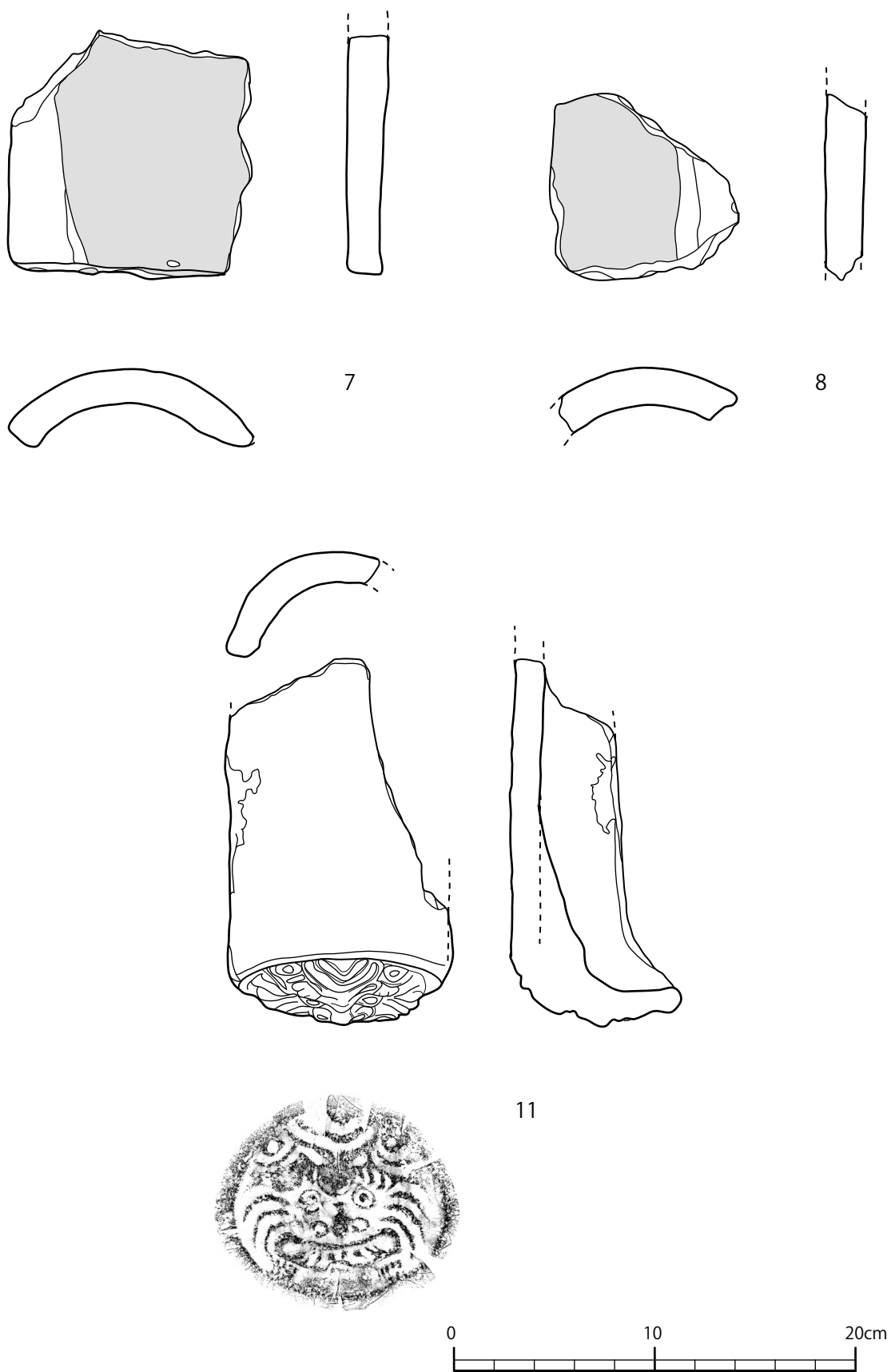


図3 北京市円明園（7・8）、内蒙古自治区ホロンバイル（11）



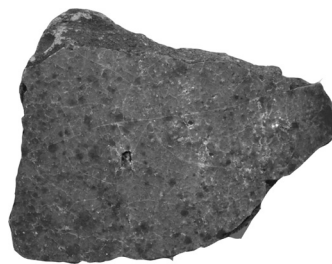
7



8



9

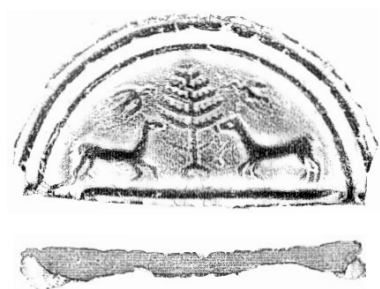


10

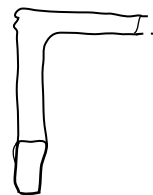


11

写真3 北京市円明園 (7～10)、内蒙古自治区ホロンバイル (11)



12



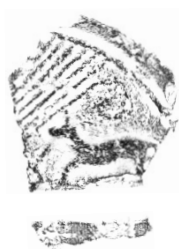
13



14



15



16

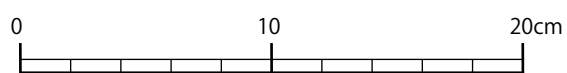


图4 山东省临淄齐故城



12



13



14



16



15



15

写真4 山東省臨淄齊故城



17



18



19



20



21

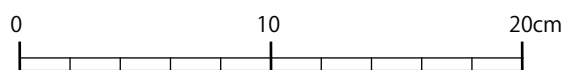


图 5 山东省临淄齐故城



17



18



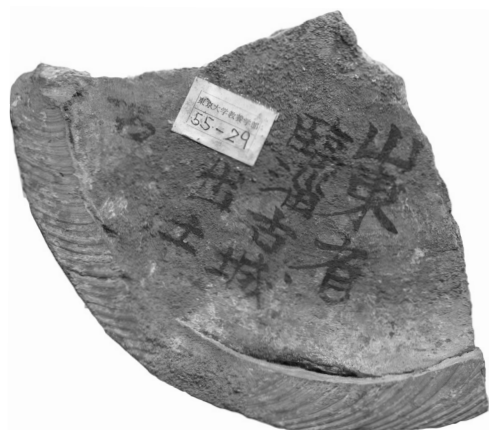
19



21

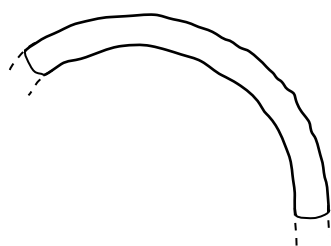
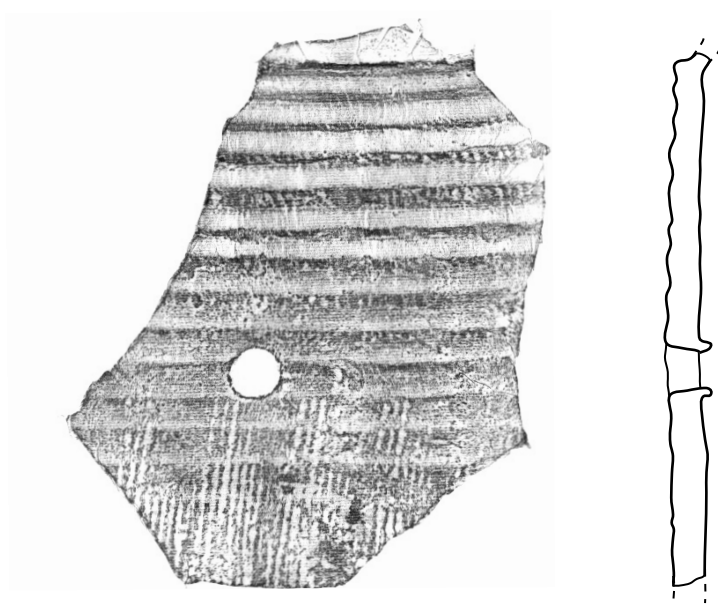


20

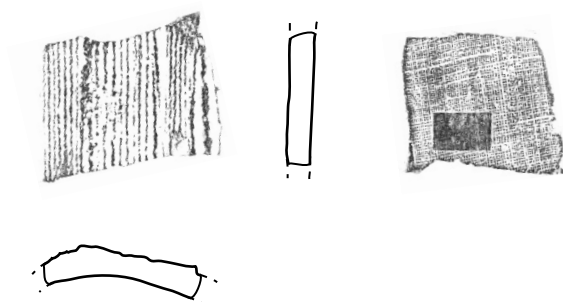


20

写真 5 山東省臨淄齊故城



22



23

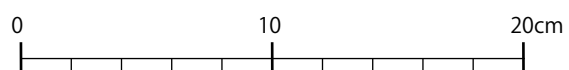


图 6 山东省临淄齐故城



22



23

写真6 山東省臨淄齊故城

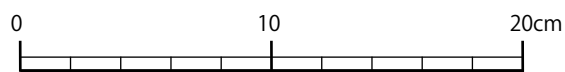
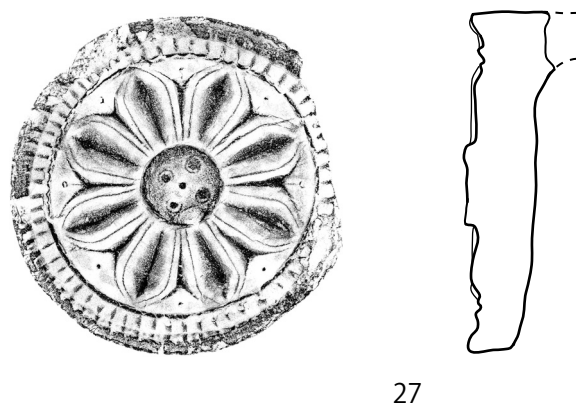
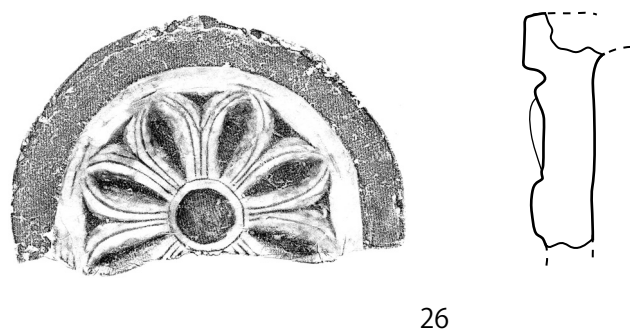
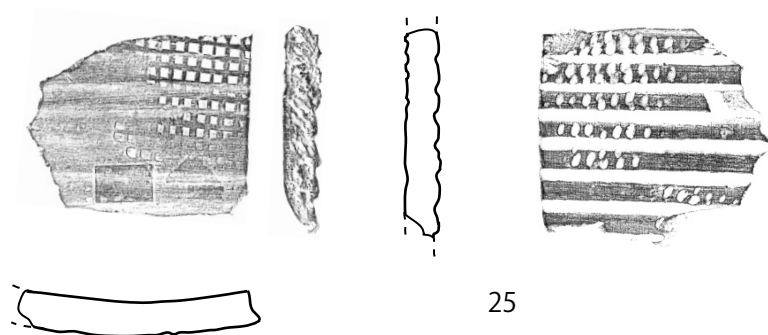
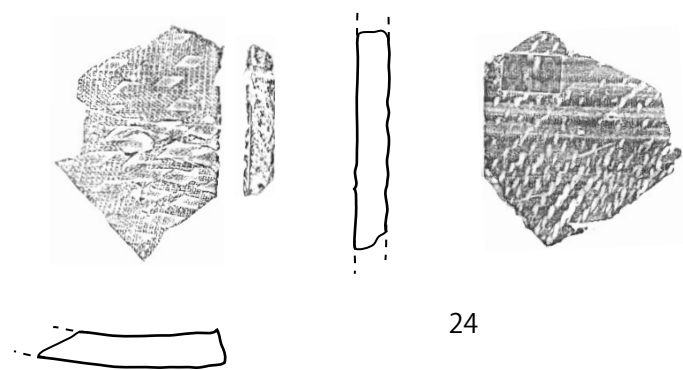


图7 山东省临淄齐故城 (24 ~ 26)、济南 (27)



24



25

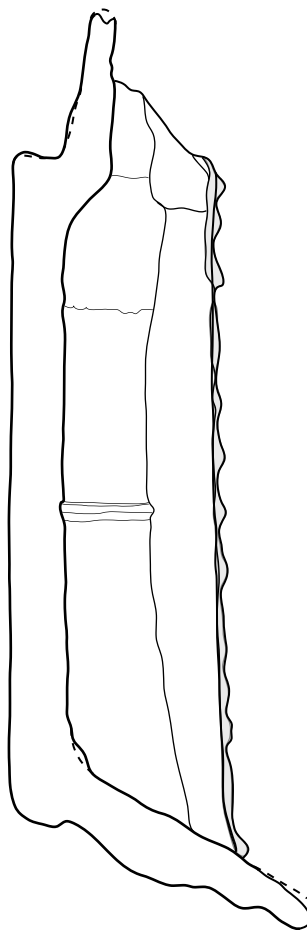
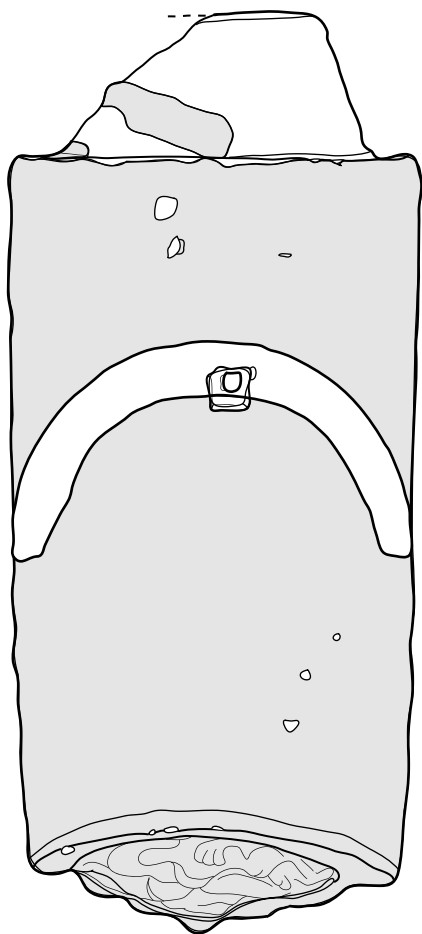


26



27

写真7 山東省臨淄齊故城 (24 ~ 26)、濟南 (27)



28

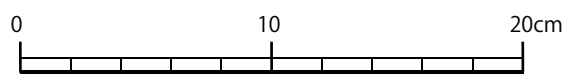
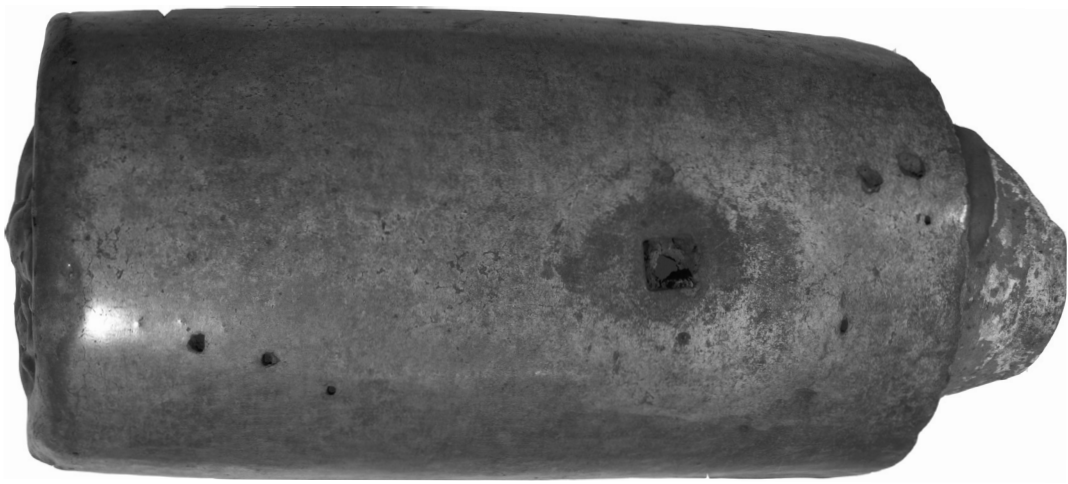


图 8 遼寧省瀋陽故宮

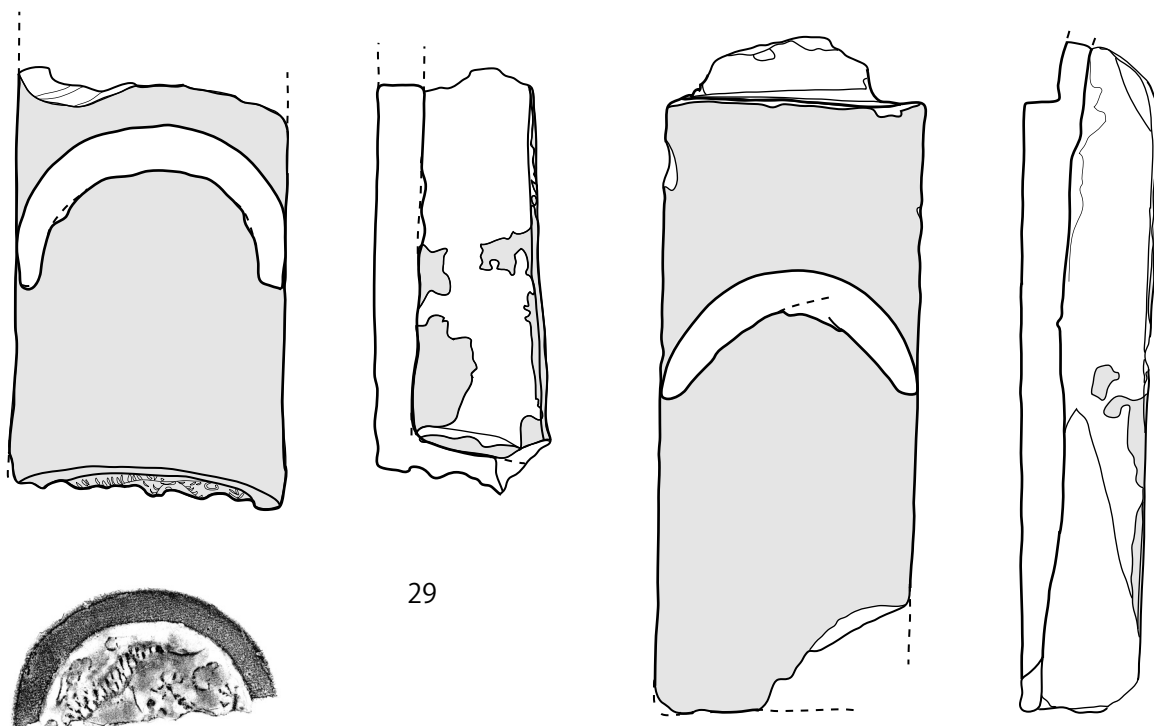


28



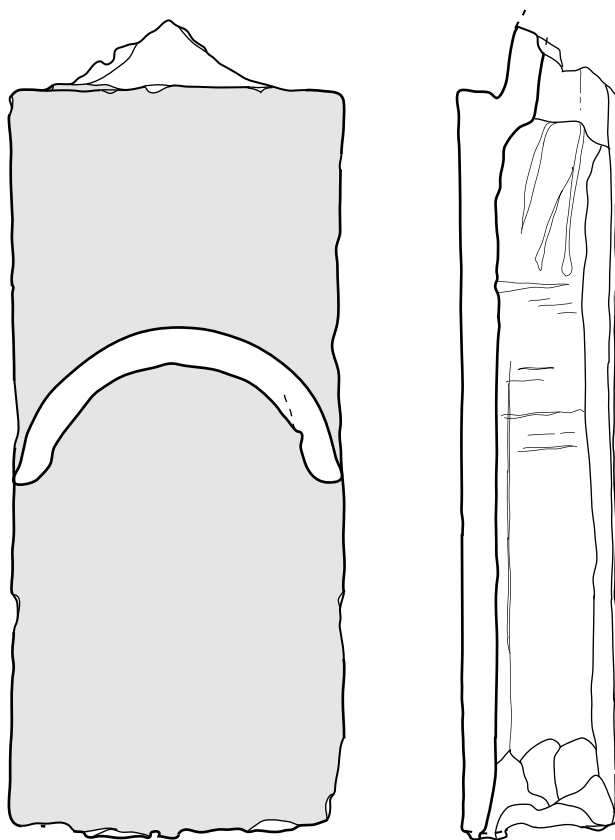
28

写真 8 遼寧省瀋陽故宮



29

30



31

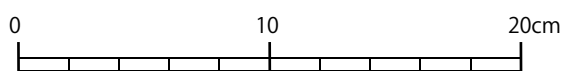
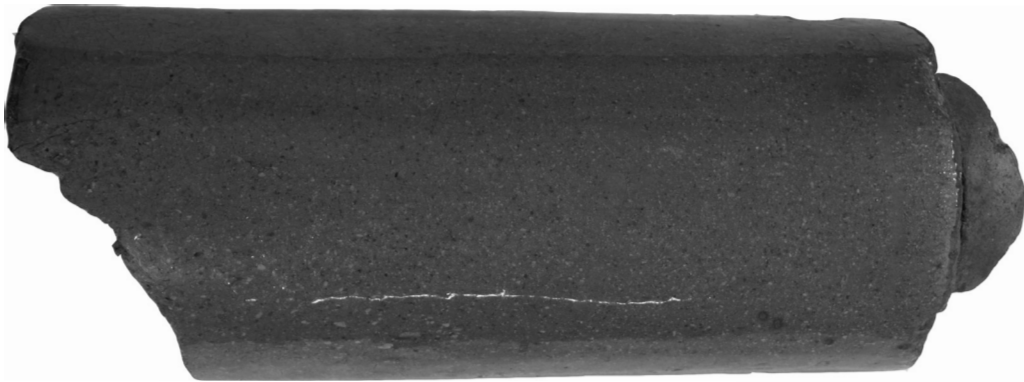


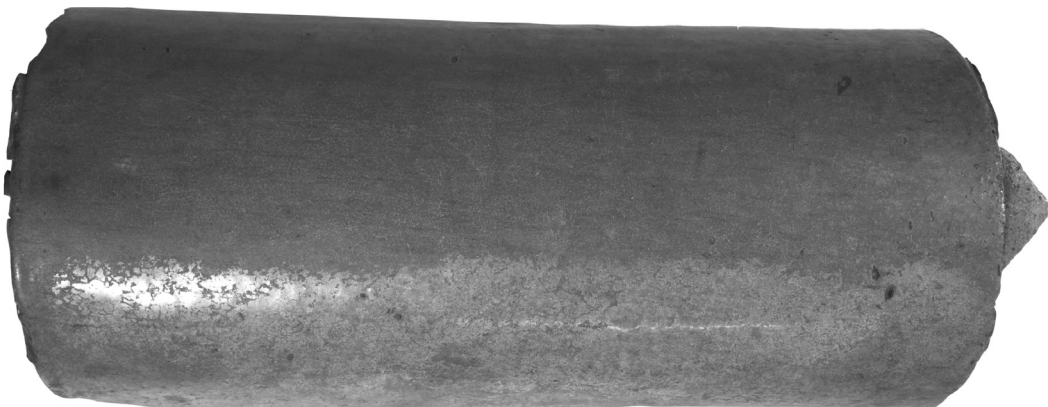
图9 遼寧省瀋陽故宮



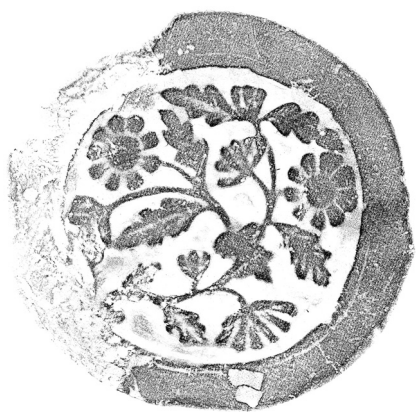
29



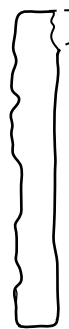
30



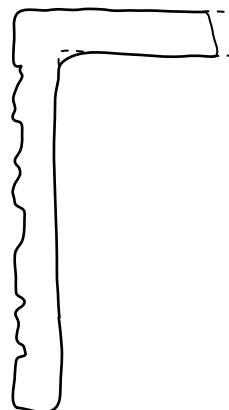
31



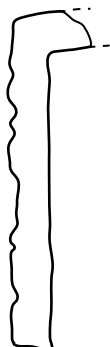
32



33



34



35



36

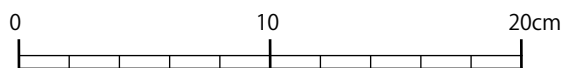


图 10 浙江省杭州石塔頭瓦窯



32



33



34



35



36

写真 10 浙江省杭州石塔頭瓦窯

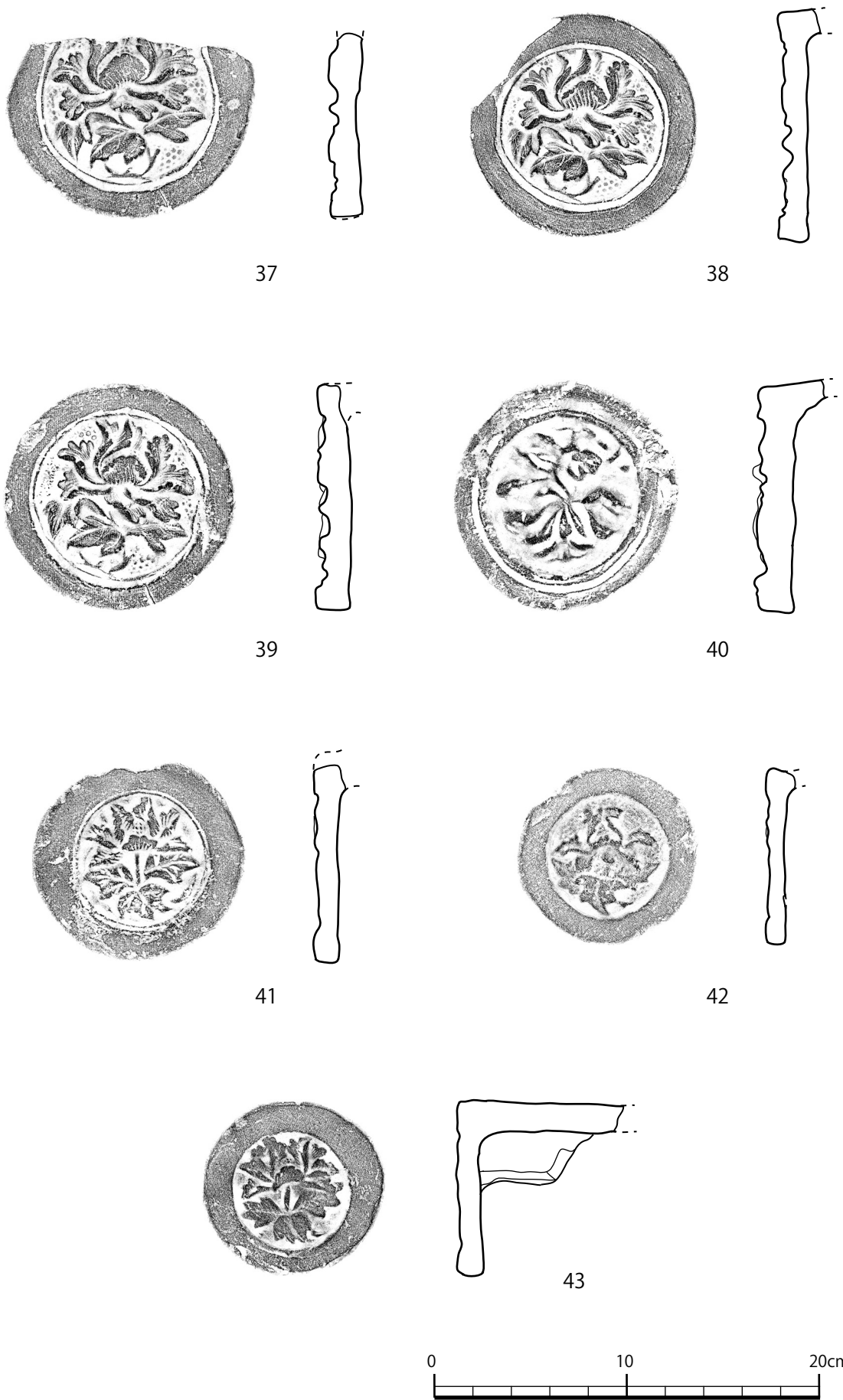


图 11 浙江省杭州石塔頭瓦窰



37



38



39



40



41

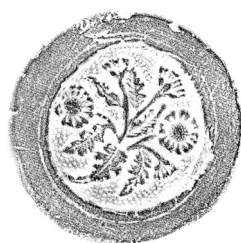


42

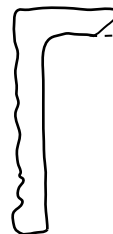
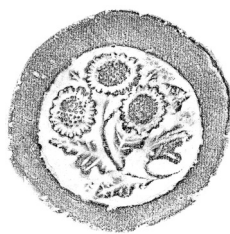


43

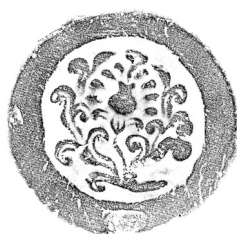
写真 11 浙江省杭州石塔頭瓦窯



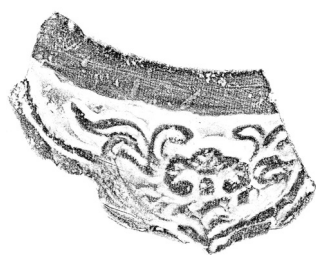
44



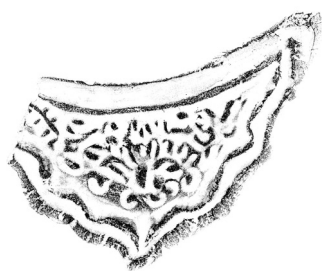
45



46



47



48

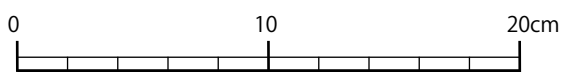


图 12 浙江省杭州石塔頭瓦窯



44



45



46

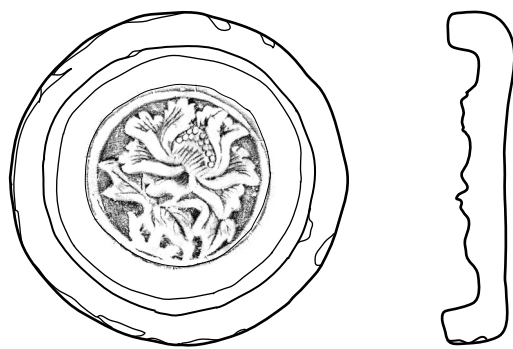


47

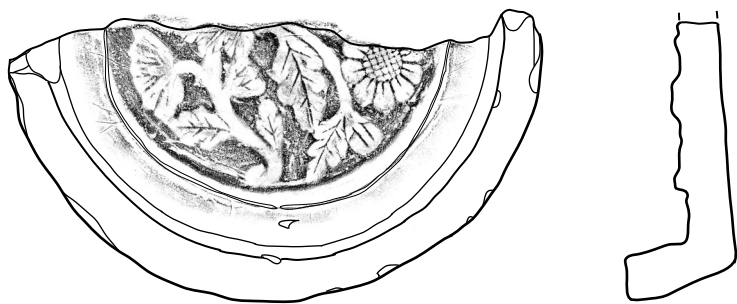


48

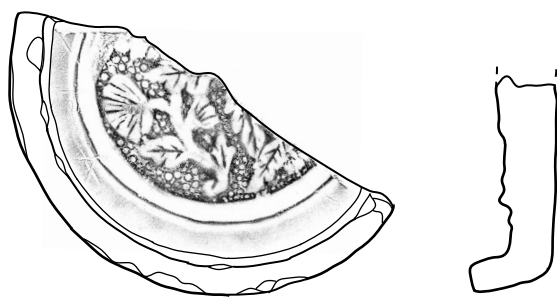
写真 12 浙江省杭州石塔頭瓦窯



49



50



51

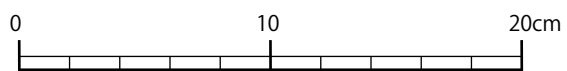


图 13 浙江省杭州石塔頭瓦窯



49

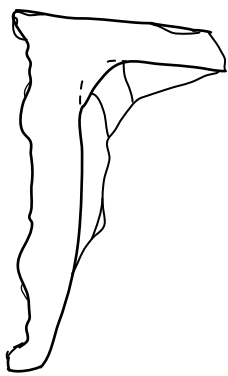
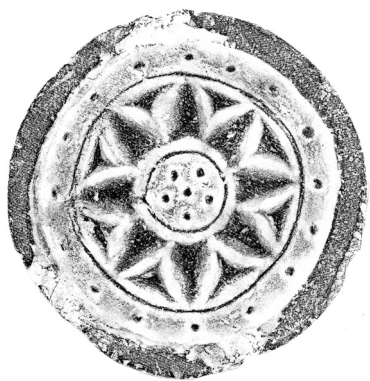


50

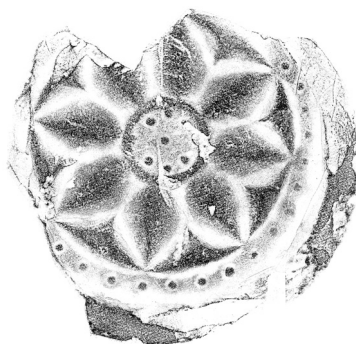


51

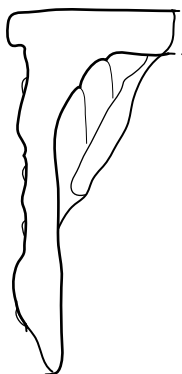
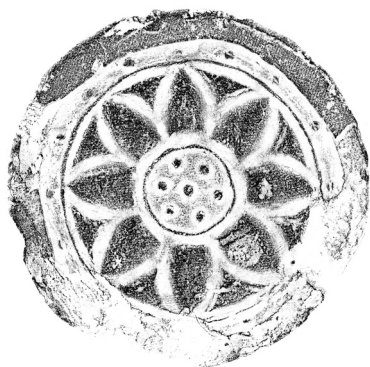
写真 13 浙江省杭州石塔頭瓦窯



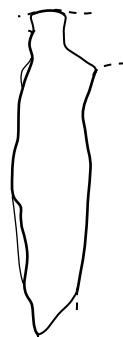
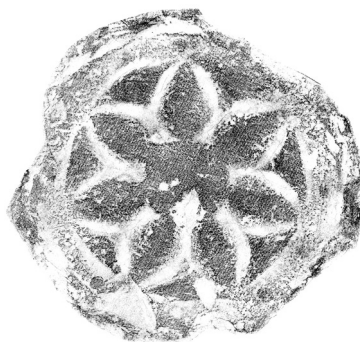
52



53



54



55

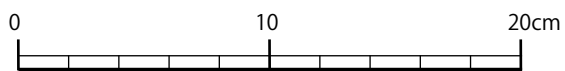


图 14 浙江省杭州南宋故宫



52



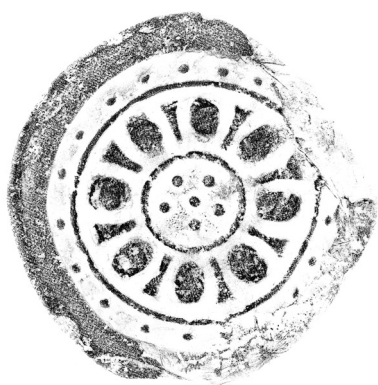
53



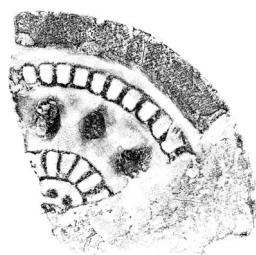
54



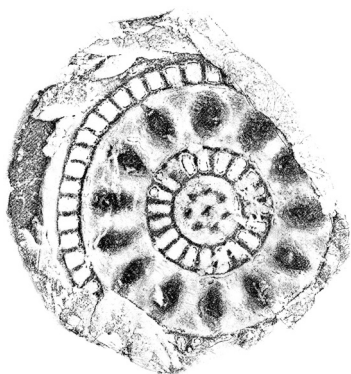
55



56



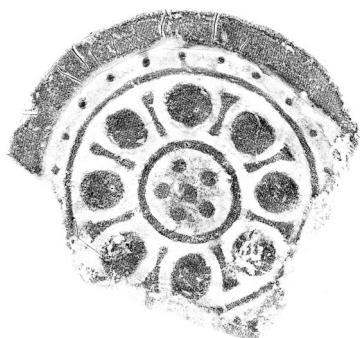
57



58



59



60

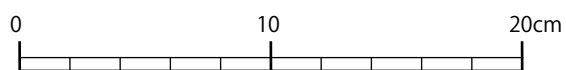
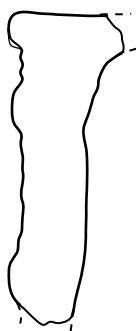


图 15 浙江省杭州南宋故宫



56



57



58

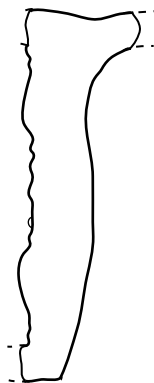
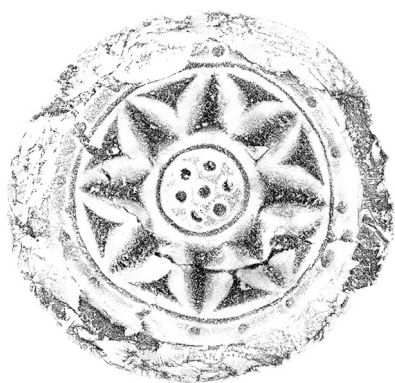


59

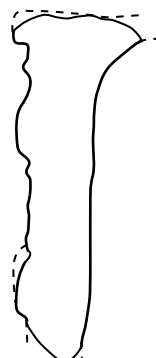


60

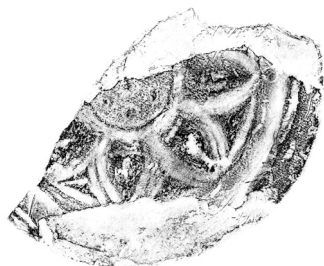
写真 15 浙江省杭州南宋故宮



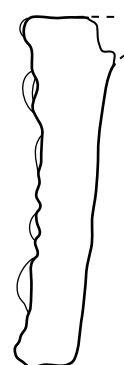
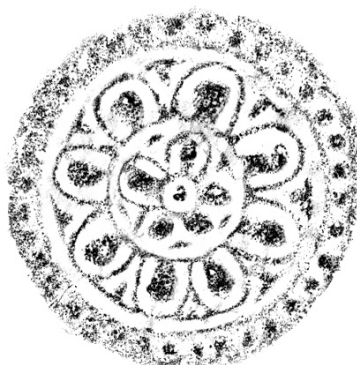
61



62



63



64

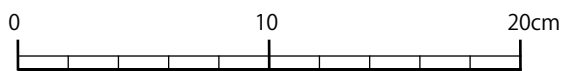


图 16 浙江省杭州南宋故宫 (61 ~ 63)、出土地不明 (64)



61



62



63

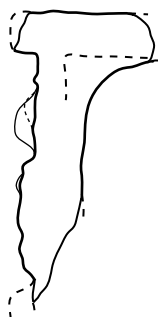
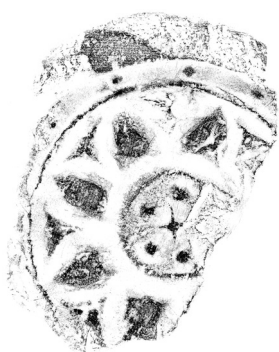
写真 16 浙江省杭州南宋故宮



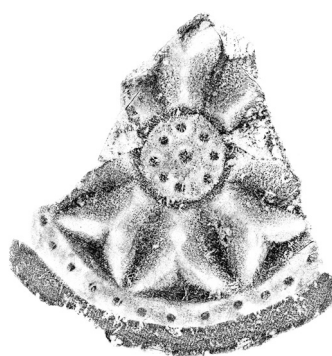
65



66



67



68



69



70

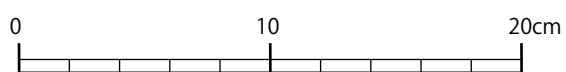


图 17 浙江省杭州凤凰山



65



66



67



68



69



70

写真 17 浙江省杭州鳳凰山



71



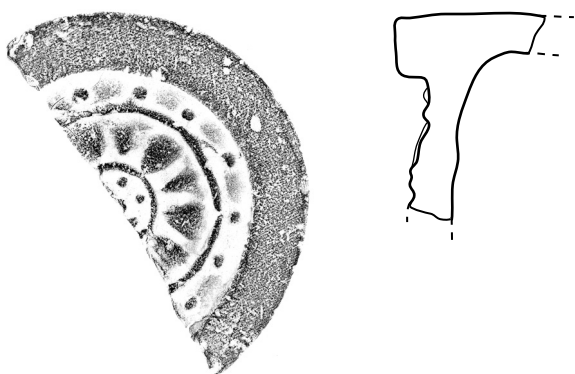
72



73



74



75



76

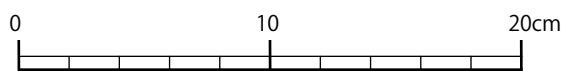


图 18 浙江省杭州鳳凰山 (71 ~ 73)、萬松嶺 (74)、郊壇下 (75)、餘姚龍山 (76)



71



72



73



74



75

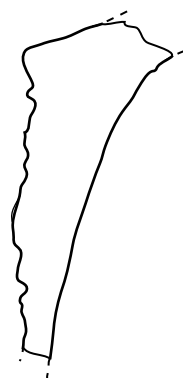


76

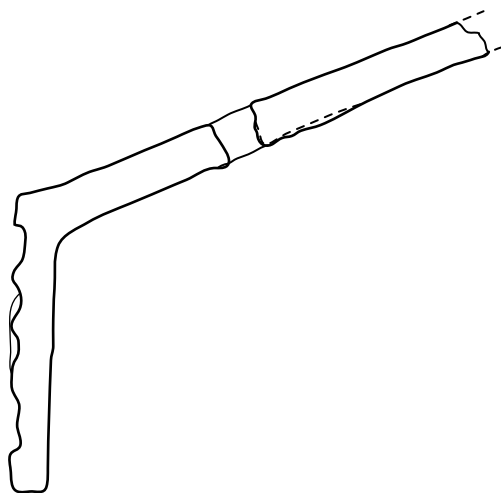
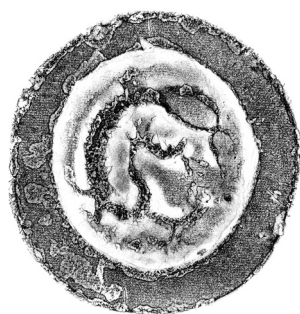
写真 18 浙江省杭州鳳凰山（71～73）、萬松嶺（74）、郊壇下（75）、餘姚龍山（76）



77



78



79

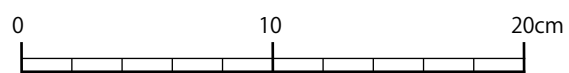


图 19 浙江省普陀山法雨禅林 (77·78)、出土地不明 (79)



77

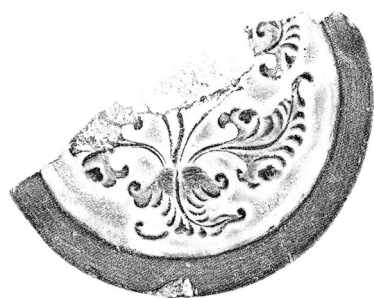


78



79

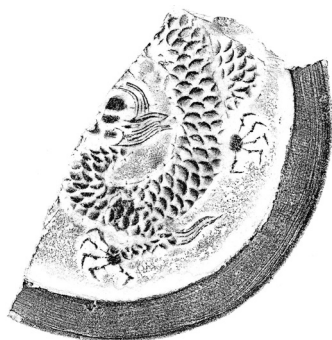
写真 19 浙江省普陀山法雨禅林 (77・78)、出土地不明 (79)



80



81



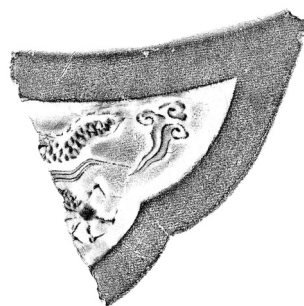
82



84



85



86

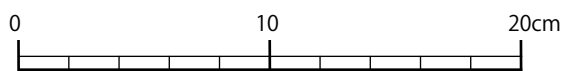


图 20 江苏省南京眼香廟瓦窯



80



81



82



84



83

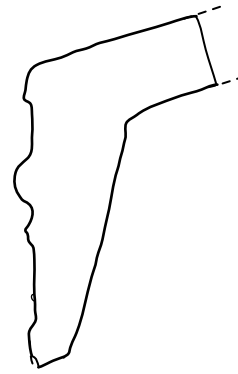
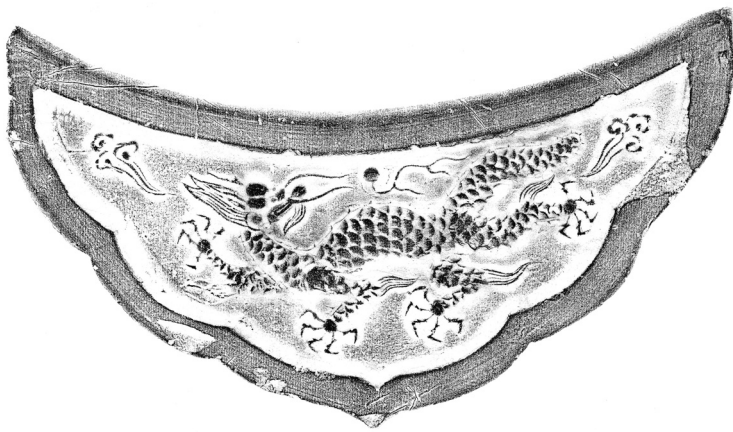


85

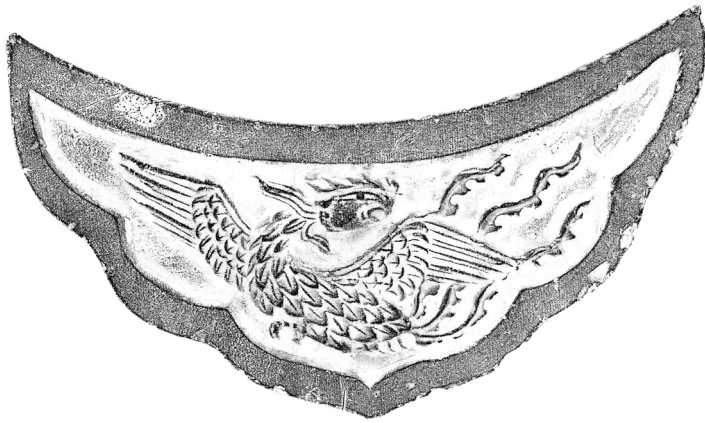


86

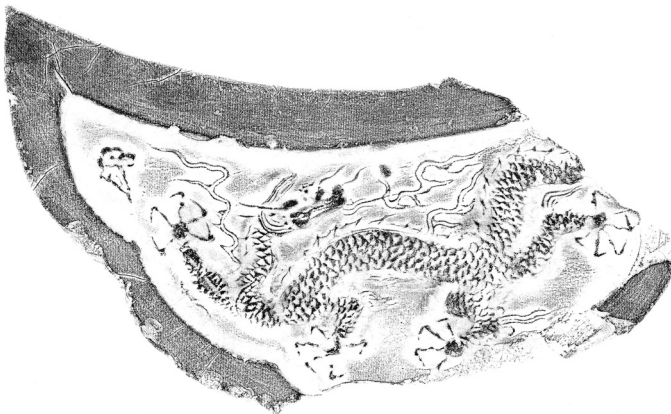
写真 20 江蘇省南京眼香廟瓦窯



87



88



89

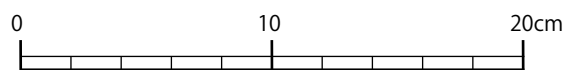


图 21 江蘇省南京眼香廟瓦窰



87



88



89

写真 21 江蘇省南京眼香廟瓦窯

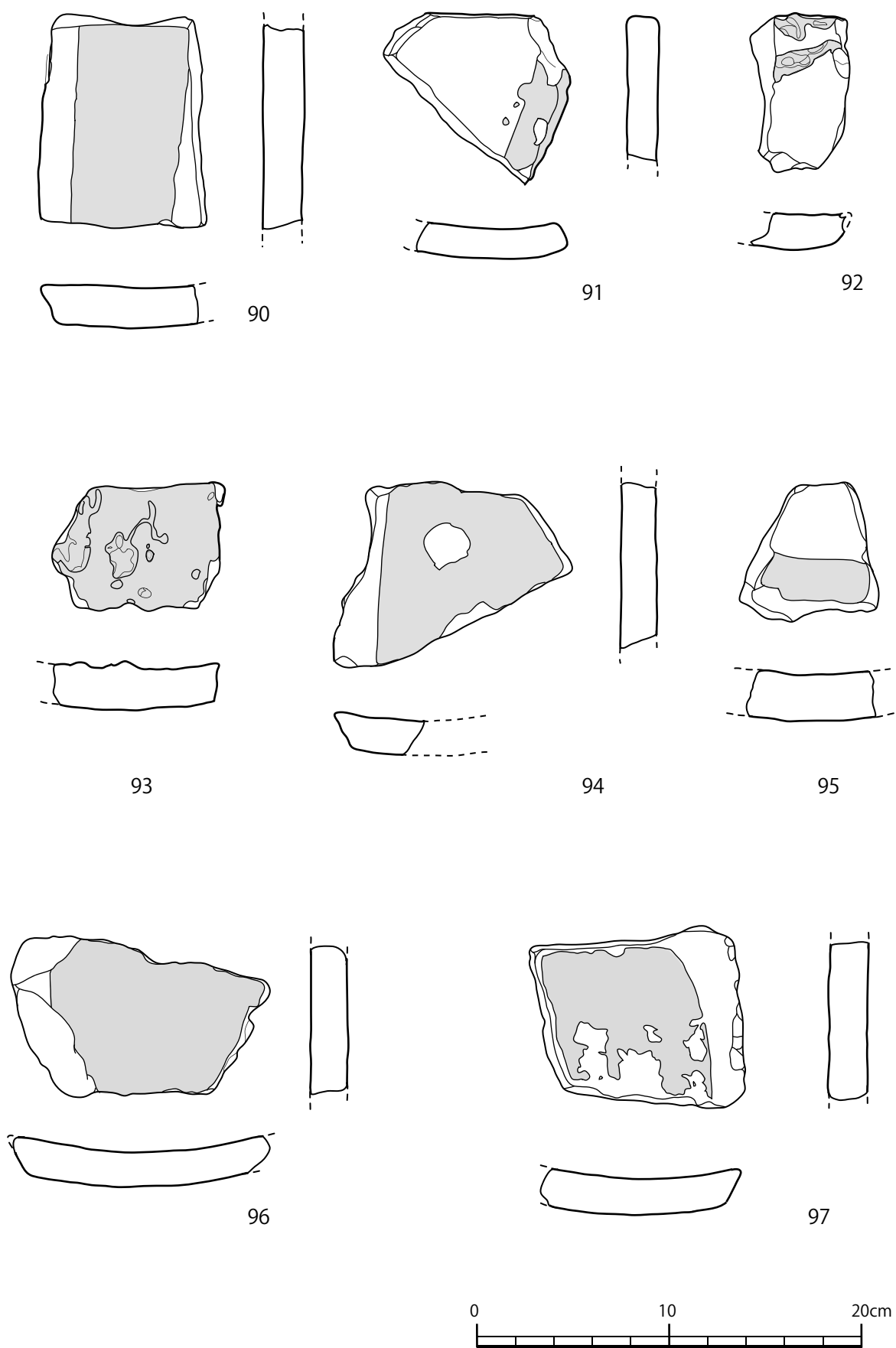


图 22 江蘇省南京眼香廟瓦窰



90



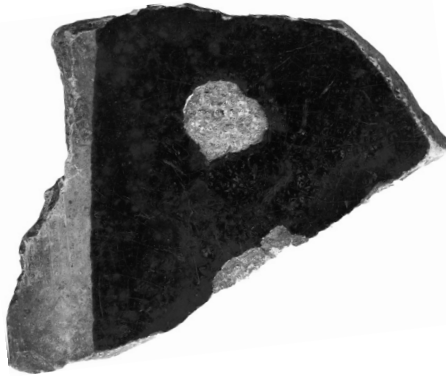
91



92



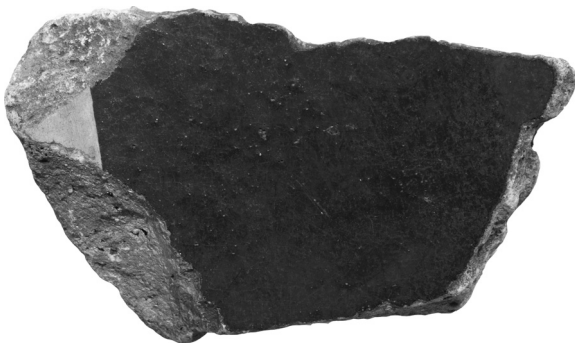
93



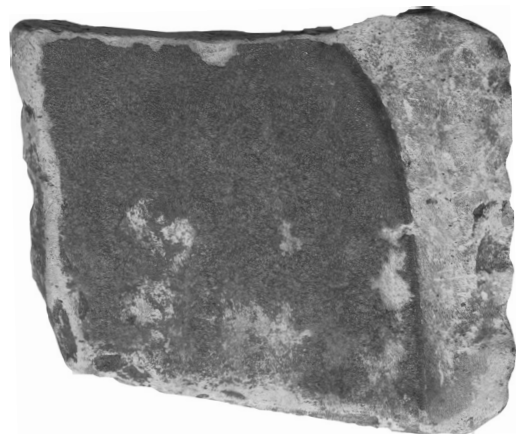
94



95



96



97

写真 22 江蘇省南京眼香廟瓦窯

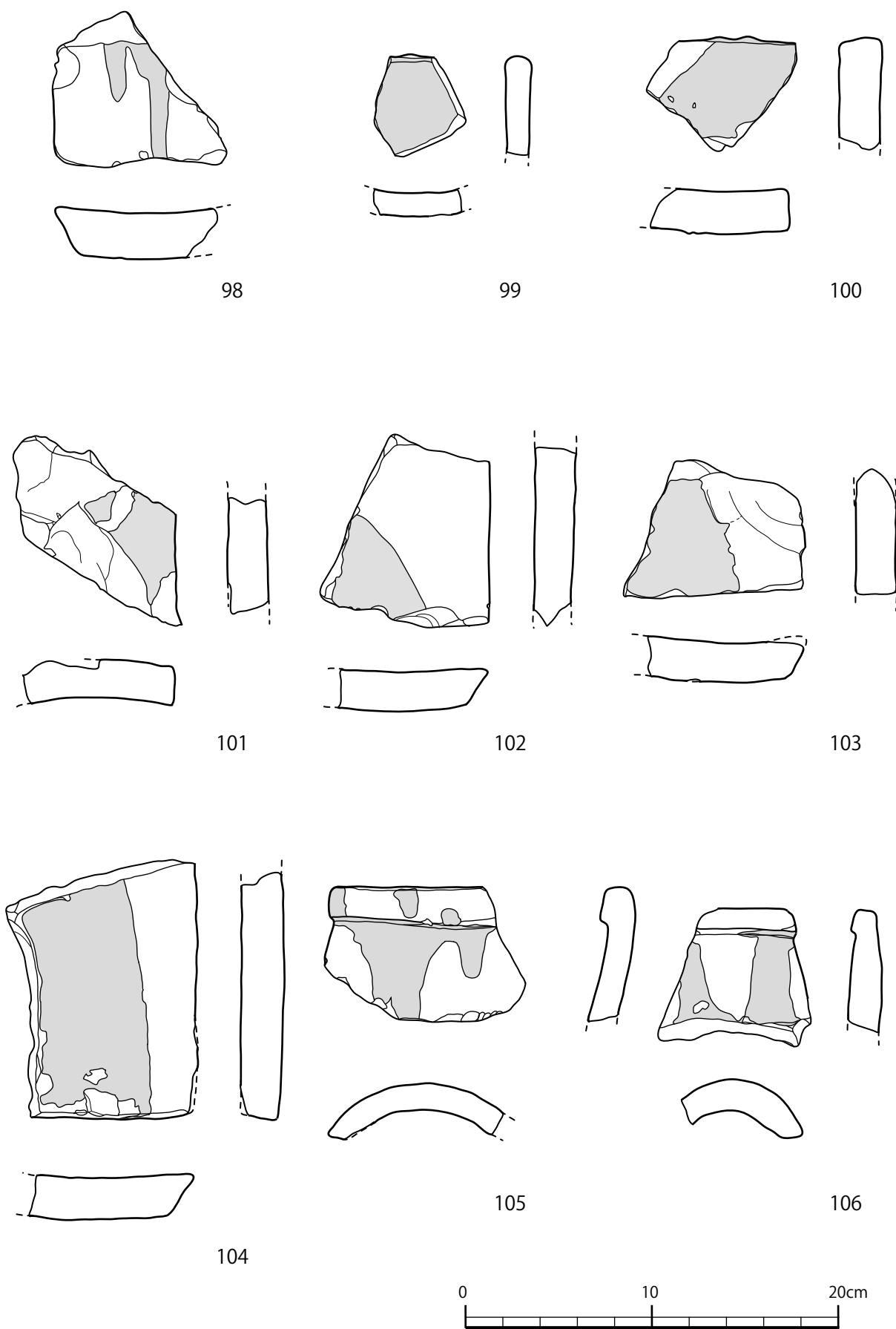
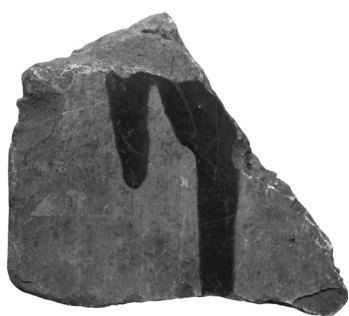


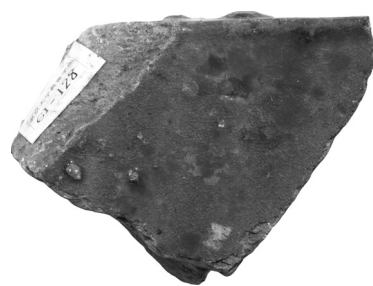
图 23 江蘇省南京眼香廟瓦窯



98



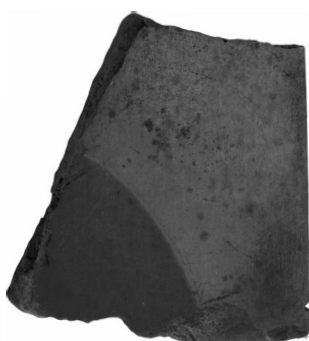
99



100



101



102



103



104

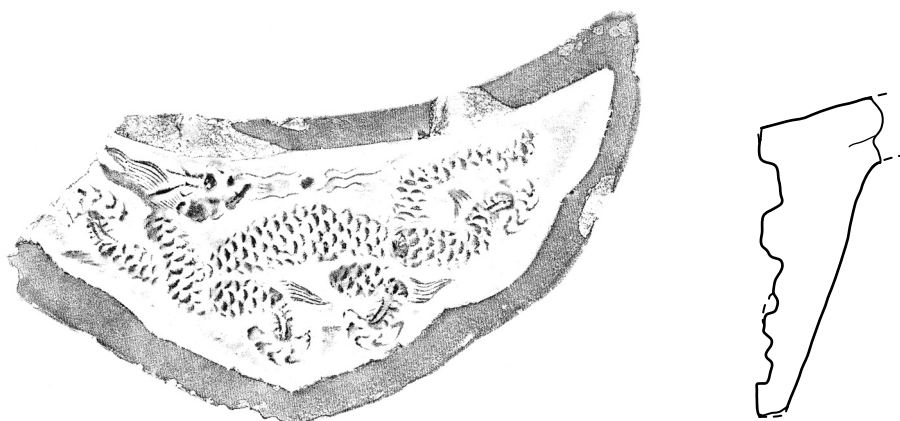


105

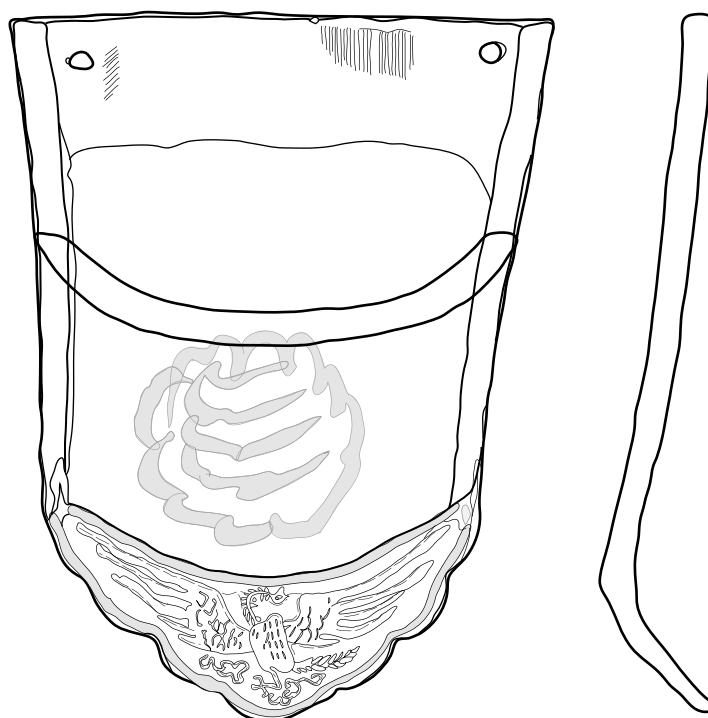


106

写真 23 江蘇省南京眼香廟瓦窯



107



108

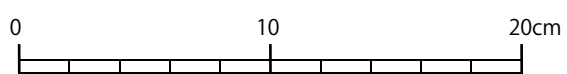


图 24 江蘇省南京孝陵 (107)、南京市内 (108)



107



108

写真 24 江蘇省南京孝陵 (107)、南京市内 (108)

一覧表

NO.	種類	主紋様	釉薬	出土地・入手地	登録番号	墨書注記	大きさ	色調	胎土	焼成	時期	備考	図・写真
1	軒丸瓦	龍紋	緑釉	北京市円明園	55-111		径 12.8、長さ 30.0	褐色	砂質	やや堅	清	凹面に漆喰・完形	1
2	丸瓦		水色釉	北京市円明園	55-108	北京円明園遺品 年十一月	径 13.8、長さ 31.5	淡褐色	砂質	やや堅	清	完形	1
3	丸瓦		紫釉	北京市円明園	55-113	北京円明園遺品 年十一月	径 14.0、長さ 31.5	淡褐色	砂質	やや堅	清	完形	1
4	甍斗瓦		緑釉	北京市円明園	55-122-1		残長 26.6、幅 7.0～8.5	淡褐色	砂質	やや堅	清	凹面に布目・凸面に漆喰・平瓦を加工したもの	2
5	甍斗瓦		緑釉	北京市円明園	55-122-2		残長 15.0、幅 9.0～10.0	淡褐色	砂質	やや堅	清	凹面に布目・凸面に漆喰・平瓦を加工したもの	2
6	甍斗瓦		緑釉	北京市円明園	55-122-3		残長 14.7、幅 6.5	淡褐色	砂質	やや堅	清	凹面に布目・凸面に漆喰・平瓦を加工したもの	2
7	甍斗瓦		黄釉	北京市円明園	55-122-4		残長 11.4、幅 12.0	淡褐色	砂質	やや軟	清	凹面に布目・丸瓦を加工したもの	3
8	甍斗瓦		黄釉	北京市円明園	55-122-5		破片	淡褐色	砂質	軟	清	凹面に布目・丸瓦を加工したもの	3
9	丸瓦		緑釉	北京市円明園	55-122-6		破片	淡褐色	砂質	堅	清	凹面に布目	3
10	丸瓦		緑釉	北京市円明園	55-122-7		破片	淡褐色	砂質	やや堅	清	凹面に布目	3
11	軒丸瓦	獣面紋		内蒙古自治区ホロンバイル	61-22	昭和九年九月ハルハ爾	径 10.0、残長 15.0	灰色	泥質	軟	清	凹面に布目	3
12	軒丸瓦(半瓦当)	樹木双獸紋		山東省臨淄	55-26	山東省臨淄古城 3 三年	径 14.5	灰色	泥質	やや堅	戦国～前漢	半瓦当へラ切り技法	4
13	軒丸瓦(半瓦当)	樹木双獸紋		山東省臨淄	55-27	臨淄古城 2	復元径 14.4	灰～淡褐色	泥質	やや軟	戦国～前漢	半瓦当へラ切り技法	4
14	軒丸瓦(半瓦当)	樹木双獸紋		山東省臨淄	55-28	■■■古城■■■	復元径 14.6	灰色	泥質	軟	戦国～前漢	半瓦当へラ切り技法	4
15	軒丸瓦(半瓦当)	樹木卷雲紋		山東省臨淄	55-29-1	臨淄古城	復元径 15.4	灰色	泥質	やや軟	戦国～前漢	半瓦当糸切り技法・布目痕	4
16	軒丸瓦(半瓦当)	樹木双獸紋		山東省臨淄	55-30-3	於臨淄古城	破片	灰色	泥質	堅	戦国～前漢	半瓦当へラ切り技法	4
17	軒丸瓦	「千秋万歳」		山東省臨淄	55-30-1	臨淄 5	破片	灰色	泥質	堅	後漢	文字「千」部分のみ 残存	5
18	軒丸瓦	「千秋万歳」		山東省臨淄	55-38	山東省臨淄古城 12	残径 15.0	灰色	泥質	堅	後漢	円瓦当後付け技法・瓦当面に一部布目痕	5
19	軒丸瓦	「千秋万歳」		山東省臨淄	55-39	山東省臨淄古城	径 14.5	灰色	泥質	堅	後漢	円瓦当後付け技法	5
20	軒丸瓦	三葉紋		山東省臨淄	55-29-2	山東省臨淄古城出土	復元径 18.3	灰色	泥質	堅	秦～前漢	円瓦当糸切り技法	5
21	軒丸瓦	卷雲紋		山東省臨淄	55-30-5	臨淄 6	破片	灰色	泥質	堅	秦～前漢	円瓦当糸切り技法	5
22	丸瓦			山東省臨淄	55-119	臨淄古城■■■採集	残長 21.0、残幅 14.0		泥質	やや堅	戦国～前漢	釘穴あり	6
23	丸瓦			山東省臨淄	55-31-3	臨淄古城	破片	灰色	泥質	堅	漢	凹面布目	6
24	平瓦			山東省臨淄	55-31-1	臨淄古城 ■	破片	灰色	泥質	堅	漢	凹面布目 + 格子	7
25	平瓦			山東省臨淄	55-31-2	昭和三年三月於臨淄古城	破片	灰色	泥質	堅	漢	格子	7

NO.	種類	主紋様	釉薬	出土地・入手地	登録番号	墨書注記	大きさ	色調	胎土	焼成	時期	備考	図・写真
26	軒丸瓦	蓮華紋		山東省臨淄	55-50	山東省臨淄古城昭和二年九月 ■■日 西面採集	径 14.9	灰色	泥質	堅	宋	円瓦当後付け技法	7
27	軒丸瓦	蓮華紋		山東省済南	55-48	昭和三年三月十日於山東省 済南取得	径 13.2	灰色	泥質	堅	宋	円瓦当後付け技法	7
28	滴水瓦	花紋	緑釉	遼寧省瀋陽故宮	55-109	■■■故宮 昭和一〇・一〇・ 一五	瓦当面 12.0 × 14.2、長 さ 32.5	褐色	砂質	軟	清	凹面布目	8
29	軒丸瓦	龍紋	緑釉	遼寧省瀋陽故宮	55-104		径 10.9、残長 15.0	褐色	泥質	やや堅	清		9
30	丸瓦		黄釉	遼寧省瀋陽故宮	55-115	・・・・	径 10.0、長さ 26.7	褐色	砂質	やや堅	清		9
31	丸瓦		緑釉	遼寧省瀋陽故宮	55-114	奉天故宮 昭和一〇・一〇・ 一五	径 13.0、残長 32.0	褐色	泥質	やや軟	清	凹面布目	9
32	軒丸瓦	菊花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-58	石 1 7	径 15.5	暗灰色	泥質	やや堅	宋	線状カキヤブリ	10
33	軒丸瓦	菊花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-61	石 8 2	径 12.5	灰色	泥質	堅	宋	線状カキヤブリ	10
34	軒丸瓦	菊花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-62	石 1 6 浙江省杭州市石塔頭	径 15.5	灰色	泥質	堅	宋	線状カキヤブリ・凹 面布目	10
35	軒丸瓦	菊花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-60	石 1 8 浙江省杭州市石塔頭	径 12.9	灰色	泥質	堅	宋	凹面布目	10
36	軒丸瓦	菊花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-55-2	石 8 3 破片		灰色	泥質	やや堅	宋		10
37	軒丸瓦	牡丹紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-57-3		径 12.7	灰色	泥質	やや堅	宋	線状カキヤブリ	11
38	軒丸瓦	牡丹紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-59-1	石 2 0	径 11.7	灰色	泥質	堅	宋		11
39	軒丸瓦	牡丹紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-94	石 2 1	径 11.6	灰色	泥質	堅	宋		11
40	軒丸瓦	牡丹紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-59-2	石 2 5	径 11.5	暗灰色	泥質	堅	宋		11
41	軒丸瓦	牡丹紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-57-2	石 2 ■	径 10.4	灰色	泥質	やや軟	宋	線状カキヤブリ	11
42	軒丸瓦	牡丹紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-55-1	石 8 5	径 9.0	灰色	泥質	やや軟	宋	線状カキヤブリ	11
43	軒丸瓦	牡丹紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-63	石 2 6	径 9.2	灰色	泥質	やや堅	宋	線状カキヤブリ・凹 面布目	11
44	軒丸瓦	菊花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-55-3	石 ■ 杭州石塔頭	径 9.1	灰色	泥質	やや堅	宋	線状カキヤブリ	12
45	軒丸瓦	菊花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-55-4	石 2 3 (?) 杭州石塔頭	径 9.0	灰色	泥質	やや堅	宋	線状カキヤブリ・凹 面布目	12
46	軒丸瓦	花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-57-1	杭州石塔頭 石 2 4	径 8.9	灰色	泥質	やや堅	宋	線状カキヤブリ	12
47	滴水瓦	花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-102	石 2 8	瓦当面 7.0 × 残幅 8.8	灰色	泥質	堅	宋		12
48	滴水瓦	花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-65	石 2 7	瓦当面 7.0 × 残幅 10.8	灰色	泥質	堅	宋		12
49	軒丸瓦範	牡丹紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-90	浙江省杭州市市石塔頭出土 石 1 2	径 13.0	灰色	泥質	堅	宋	土製	13
50	軒丸瓦範	菊花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-93-1	石 1 0 ? 破片		灰色	泥質	堅	宋	土製	13
51	軒丸瓦範	菊花紋		浙江省杭州市市石塔頭	55-93-2	石 1 1 破片		灰色	泥質	堅	宋	土製	13
52	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市市南宋故宮	53-11	杭州南宋故宮址 昭和五年 三月■■日 (■■■■)	径 14.2	灰色	泥質	堅	宋	凹面布目	14
53	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市市南宋故宮	55-52	昭和■■年……南宋故宮址 (饅 頭山)	復元径 14.8	灰色	泥質	堅	宋		14
54	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市市南宋故宮	55-47-2	……故宮址	径 14.0	灰色	泥質	やや堅	宋		14
55	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市市南宋故宮	55-124	……(消えてしまっ て判読不可)	復元径 14.0	灰色	泥質	やや軟	宋		14

NO.	種類	主紋様	釉薬	出土地・入手地	登録番号	墨書注記	大きさ	色調	胎土	焼成	時期	備考	図・写真
56	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市南宋故宮	55 - 41 - 1	南宋宮殿内宮■苑址と・・・ 昭和六年一月十八日杭州鳳凰山中山紀念造林塔下中腹に於て 修内司窯外窯付近	径 14.1	黄灰色	泥質	やや堅	宋		15
57	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市南宋故宮	55 - 41 - 2	昭和五(?)年三月二日南宋故宮址(四明公所)	破片	灰色	泥質	やや堅	宋		15
58	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市南宋故宮	55 - 42	昭和五年三月二日杭州南宋故宮址(四明公所)	復元径 15.4	灰色	泥質	やや堅	宋		15
59	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市南宋故宮	55 - 47 - 1	昭和六年三月十四日杭州南宋故宮址南宋故宮址	破片	灰色	泥質	やや軟	宋		15
60	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市南宋故宮	55 - 53	昭和五年三月二日杭州南宋故宮址(四明公所)	復元径 14.0	灰色	泥質	やや軟	宋		15
61	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市南宋故宮	61 - 12	昭和五年三月■日杭州南宋故宮址・・(饒頭山)	径 14.6	灰色	泥質	やや堅	宋		16
62	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市南宋故宮	61 - 13	昭和五年三月一日杭州南宋故宮址(饒頭山)	径 14.6	灰色	泥質	やや軟	宋		16
63	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市南宋故宮	55 - 46	昭和五年三月十六(?)日南宋故宮址二テ	破片	灰色	泥質	堅	宋		16
64	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市南宋故宮	55 - 54		径 14.0	黄灰色	砂質	軟	宋	米内山寄贈でない可能性あり。朝鮮半島出土品か？	16
65	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市鳳凰山	53 - 9 - 1	杭州鳳凰山	破片	灰色	泥質	やや軟	宋		17
66	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市鳳凰山	53 - 9 - 2	昭和六年 杭州鳳凰山	破片	灰色	泥質	堅	宋		17
67	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市鳳凰山	53 - 10	昭和六年 一月十八日 杭州鳳凰山白塔下	復元径 16.0	黄灰色	泥質	堅	宋		17
68	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市鳳凰山	55 - 44	昭和六年 一月十八日 杭州鳳凰山白塔下 南宋故宮 復元径 16.4 ■苑址？		黄灰色	泥質	堅	宋		17
69	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市鳳凰山	55 - 45 - 1	■月十四日 南宋故宮址	破片	灰色	泥質	やや軟	宋		17
70	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市鳳凰山	55 - 45 - 3	昭和六年 一月十八日 杭州鳳凰山白塔下	破片	淡灰色	泥質	やや軟	宋		17
71	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市鳳凰山	55 - 121 - 2	昭和■年十二月 杭州鳳凰山	破片	灰色	泥質	やや軟	宋		18
72	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市鳳凰山	55 - 121 - 3	昭和六年三(?)月十四日 杭州鳳凰山・・・	破片	灰色	泥質	やや軟	宋		18
73	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市鳳凰山	55 - 51	昭和■年十二月 杭州鳳凰山	破片	灰色	泥質	やや軟	宋		18
74	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市萬松嶺	55 - 45 - 2	・・・内側 昭和■年三月二日 ・・・	破片	灰色	泥質	やや軟	宋		18
75	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市郊壇下	55 - 43	杭州・・・郊壇下	復元径 15.0	灰色	泥質	やや堅	宋		18
76	軒丸瓦	蓮華紋		浙江省杭州市餘姚龍山	55 - 121 - 1	餘姚龍山(四一)昭和六年四月三日	破片	灰色	泥質	やや軟	宋		18

NO.	種類	主紋様	釉薬	出土地・入手地	登録番号	墨書注記	大きさ	色調	胎土	焼成	時期	備考	図・写真
77	軒丸瓦	龍紋	緑釉	浙江省普陀山法雨禪林	61 - 19	昭和三年十月三十六日支那 浙江省普陀山法雨禪林山門 舊瓦	復元径 16.0	淡褐色	泥質	堅	清		19
78	滴水瓦	龍紋	緑釉	浙江省普陀山法雨禪林	61 - 20	浙江省普陀山法雨禪林山門	破片 残 長 11.7 × 残 幅 13.2	淡褐色	泥質	堅	清		19
79	軒丸瓦	龍紋	緑釉	不明	55 - 112		径 11.5、残 長 19.0	褐色	砂質	堅	清		19
80	軒丸瓦	草花紋		江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 56	南京眼香廟瑠璃窯	破片	淡褐色	泥質	堅	明		20
81	軒丸瓦	草花紋		江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 89	南京眼香廟瑠璃窯	破片	淡褐色	泥質	堅	明		20
82	軒丸瓦	龍紋		江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 100 - 1	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	堅	明		20
83	滴水瓦		黒釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 100 - 2	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		20
84	軒丸瓦	龍紋		江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 103	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		20
85	軒丸瓦	龍紋	黄釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 107	南京眼香廟	破片	白色	泥質	やや堅	明		20
86	滴水瓦	龍紋	緑釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 106	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		20
87	滴水瓦	龍紋		江蘇省南京市眼香廟瓦窯	61 - 23 - 1	南京眼香廟瑠璃窯	瓦当面 11.5 × 28.3	淡褐色	泥質	堅	明		21
88	滴水瓦	鳳凰紋		江蘇省南京市眼香廟瓦窯	61 - 23 - 2	南京眼香廟瑠璃窯	瓦当面 11.0 × 26.9	褐色	泥質	堅	明		21
89	滴水瓦	龍紋		江蘇省南京市眼香廟瓦窯	61 - 23 - 5	南京眼香廟■瑠璃窯	瓦当面 残 11.5 × 27.5	淡褐色	泥質	やや堅	明		21
90	平瓦		黄釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 100 - 3	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		22
91	瓦		黄釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 101 - 1	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		22
92	瓦		黄釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 101 - 2	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		22
93	瓦		褐釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 101 - 3	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	堅	明		22
94	平瓦		黒釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 101 - 4	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		22
95	瓦		水色釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 101 - 5	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		22
96	平瓦		黒釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 120 - 3	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		22
97	平瓦		水色釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 120 - 4	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		22
98	瓦		黒釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	61 - 23 - 3	南京眼香廟	破片	褐色	泥質	やや堅	明		23
99	瓦		緑釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	61 - 23 - 4	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		23
100	瓦		緑釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	61 - 128	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	堅	明		23
101	瓦		黄釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 123 - 1	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	堅	明		23
102	平瓦		緑釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 123 - 2	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	堅	明		23
103	平瓦		水色釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 123 - 4	南京眼香廟	破片	白色	泥質	やや軟	明		23
104	平瓦		水色釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 123 - 3	南京眼香廟	残 長 10.0 × 残 幅 13.5	淡褐色	泥質	堅	明		23
105	丸瓦		黄釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 120 - 1	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		23
106	丸瓦		黄釉	江蘇省南京市眼香廟瓦窯	55 - 120 - 2	南京眼香廟	破片	淡褐色	泥質	やや堅	明		23
107	滴水瓦	龍紋	黄釉	江蘇省南京市孝陵	55 - 105	南京孝陵 明治四十三年	瓦当面 11.3 × 残 25.0	淡褐色	泥質	堅	明		24
108	滴水瓦	鳳凰紋	青花	江蘇省南京市	55 - 98	南京孝陵	瓦当面 7.0 × 17.2、長さ 23.0	淡褐色	泥質	堅	明	完形	24

東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館
資料集 4 - 米内山庸夫コレクション (瓦) -

2010 年 3 月 29 日 発行

編集・発行 東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館
〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

印刷 (有)平電子印刷

〒 970-8024 福島県いわき市平北白土字西ノ内 13